
交じりあう世界の中で

有里康生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交じりあう世界の中で

【Nコード】

N5756T

【作者名】

有里康生

【あらすじ】

世界は繋がっている。それは1957年のヒュー・エヴェレット三世の提唱した多世界解釈を始め様々な形でそれは世界を賑わしてきた。そして1999年、二十世紀に終わりを告げようとしたその時、世界はもう一つの世界とコンタクトに成功した…。

この作品は作者の処女作です

下手くそな文章ですがご了承下さい

あと、ちょっと重めの話が多くなりそうですがこれも重ねてご了承

始之事 逃走騎（前書き）

まず先に

この作品は作者の処女作です。地雷自爆要素満載です。ご注意を。
チート臭く見せるけど大し奴じゃない感じにする予定。
誤字脱字は勿論、批判、感想どんどんお待ちしております。

始之事 逃走騎

男は騎航する中、怒りに手が震えていた。

つい先日、親友を正体不明の敵に斬り殺されたからだ。

場所は出羽が寒村の一つ。六波羅ロクハラに仕えていた筈の小さな寺社の宮司が愚かにも六波羅に逆らい、逆賊岡部弾正に同調し反旗を翻したからだ。

その男の腕は真当流を修めるとあって確かな腕であったものの老いが来た爺に過ぎず、さした問題のない最近の大和ではよくある話だ。

しかし、想定外の事が起きた。

例え、いくら敵を匿かくっていようと鎧士がいしが十もいたのだ。劔胄ツルギ、鎧士の状態は共にこちらのが上である。同数ならば半数の犠牲が出るか否か程度だろう。

全滅など、有り得る筈が無いのだ。

それら全てが相討ちならばまだ許せる。どんなに劔が優れようとその場での体調等は変えることは無理やまぬ事だからだ。その証拠に幾つかの劔胄には母衣ホロを断たれ墜落する所を道連れにしたと見られる遺体が残っていた。

しかし、親友の部隊長仕様の物も含めた幾つかの遺体は明らかにそれらとは異なっていた。

斬られていたのだ。

間違い無く刃金と側金僅かな隙間、隙の多い脇や股下を確実に狙って手足を切り落とし、更に動けぬ所に首を落とす。精密無比な太刀筋が可能にしたその妙技の使い手は斬り合いで生き延びた鎧士数名と数多の兵を殺めた。

その技は敵ながら天晴れ、と常ならば憎々しくも呟いたやもしれぬ。

彼奴がその場で死んだのならば、だ。

運良く、その者は生き延びたようだ。落人の中にそれ程の血を吸った刀は見受けられぬ事から確実にそうだと言える。

友を、数多くの部下を斬った仇を討てる。我が一太刀にて命を乞い、苦しみ惨めに死ぬ姿を思い、凄惨な笑みを浮かべる。

男には勝算があった。

地に足を付けているのならばそれを上から狙えばいい。そうでなくとも手はある。

双輪懸フタワガカリの際、その最中で常より急角度に頭を上げ、相手の来る位

置を予測し姿勢を直すと同時に加速。彼我の距離を一直線にて詰め、上昇最中の相手の後ろ首、もしくは姿勢制御最中の敵の喉笛を刺す。

彼の家が代々伝えし秘剣『百舌哭』。

嘗ての藩政からの時代の移り変わりの煽りを受け没落し、家宝の劔冑すら売らねばならぬほどに貧窮の憂い目にあった我が家ではあったが、祖父から伝えられ会得したそれは甲鉄をも貫く。

その上で彼奴は間違い無く双輪懸を不得手としている。

その殆どが地に足付けた者であることからそう考えて、よもや間違いはなからう。

そして、幾ら剣の腕は立っていても熱量を維持し続ける事は出来まい。追われる身ならば尚の事。

出羽の地は未だ山々が多く、潜む所は如何様にもありそうだが、かと言ってゆるりと体を休める訳にはいかない。

必然的に体力、気力は共に落ちているのは見ずとも分かる。

それに対し、此方側は仲間を討たれた怒りに意気軒昂。

此の時点で既に差がついているとみていいだろう。

しかも、手の内を知っている此方に、手の内を知らぬ相手と死合わねばならぬという圧倒的な不利を覆せはしまい。

《隊長、そろそろ目標の推定移動距離の限界地点です。恐らくは此の辺りかと》

副官の坂出の言葉が冷静になりつつあった頭に少しの熱を灯させた。

落ち着け、己にそう言い聞かせ部下に指示を出す。

《分かっている。各騎、これより地上に一時下り、調査を開始する。相手は腕利きだ、警戒を怠るなよ》

隊長の言葉を合図に三騎の劔冑は地へ足をつけた。

斥侯故にさほどの人数を割けないが故、数こそ少ないものの最も信頼出来る二人である。

互いに離れ過ぎぬように、互いが互いを確認し続けれるギリギリの位置で見渡す。少なくとも、先日の二の轍を踏む訳にはいかない。

それ故の対処は効率よりも優先だった。この報が知られ、更に失策をする羽目になると六波羅の武名に泥を塗り、それが反乱分子の助長になりかねないからだ。

只でさえ岡部弾正のような輩や旧陸海軍の残党は厄介なものだ。最近だと陸の雄であった石馬戒厳の再来なる者など愚かしくも六波羅に刃向かう愚者は後を絶たない。

今の六波羅があるからこそ大和は辛うじて国を維持出来ているのを分からねぬのか。

もし、今六波羅が消えれば今度こそ大和は英国の属国と化すだろう。

それを許してはなるまいというのに。矢張り、旧遺物はそのまま時代と共に消えるべきである。

そんな思考に耽っていた隊長は、それ故にその瞬間まで気が付かなかった。

僅かに揺れる草木の音。それは風とは違う、明らかにナニカが其処にいるという証。劔冑に強化された五感はそれに反応し、近くにいた部下の一人、佐々岡が銃を撃つ。

八六式重機関銃の7・7mm×58弾は辺りの樹木を薙ぎ倒し、長きに渡って降り積もった木の葉を蹴散らし、腐葉土を周りに撒き散らす。

ある程度の掃射の後、一瞬の静寂。同時に警戒を強める。

相手が最悪である事を想定し、臨むは兵法の基礎だ。

戦闘で気を抜くは即ち死、精神も策も張り巡らして臨む。

吹き飛ばされた朱は此方からも確認出来た。そして、吹き飛んで来た物を確認する。

僅かに残った茶色の毛を生やした後ろ脚。これは、兎だ。どうやら、緊張のし過ぎからの失敗のようだ。

《おい、佐々岡。良かったな。今日の撃墜^{スコア}数はまず一羽だ》

《ははは、それはいい。佐々岡、後で奢ってくれよ》

近くに落ちた兎の脚をつまんで見せる自分と坂出で佐々岡をからかい、場の空気を緩ませる。

まだ土煙の中で緊張状態にあらう佐々岡を、そして自分達を落ち着かせる為に。

《…？どうした、佐々岡？》

様子が可笑しい、それに気付いた坂出が近付く為に足を向けようとしたその時。

《ぐうつ、かはあ……！？》

僅かに土煙が晴れようとする中、其処に確かな紅が混じる。

《っ！！》

ゆっくりと崩れ落ちる佐々岡だったモノの背後にいる敵を視認すると最悪の事態だと心の中で舌打ちする。

彼等の纏う数打とは明らかに異なる武骨な造りながらも、壮嚴さを見せるのは大和に伝わりし、今は失われつつある技術を以て作られた間違い無く世界最強を誇る劔胃の中でも更に強力な代物、真打劔胃だ。

煮えたぎり、半ば思考が止まった頭よりも体が先に動き、すぐに油断を見せず攻防どちらにも移れる八相の構えで相手と対する。

すぐ側にいる坂出も手に持つ機関銃を四、五十発撃つとすぐさま銃を投げ捨て刀を抜くと同時に上段へと構えると相手に近付く。幾ら堅牢を誇る劔冑とて機関銃で撃たれば足は止まる。その隙を狙う。

一見無防備にも見えなくはないが、力に自信がある坂出の振るう一刀ならば首を切らずとも頭に当たれば、例えそれがもし真打であろうとも脳震盪は免れまい。

しかし、今の坂出は間違はなく怒りで我を忘れていた。その様な状態で下手に動くとは死以外有り得なくなる。

《坂出、落ち着け！ 一先ず陣形を組んで囲むつ、糞ッ！！》

今の坂出は怒りで致命的なまでに周りを把握出来ていない。或いは目の前に対峙するそれが己の物を上回る性能を持つ事も彼を駆らせたのかもしれない。

坂出の無慈悲なまでの迅さを持った一刀が振り下ろされる。間合い、剣速、そして気合。その全てに於いて今までの稽古のそれを凌駕し弧を描く。

《なっ！》

隊長の坪井はその一瞬の攻防に思わず目を見張った。

頭から首筋へ振り下ろされた太刀筋を小太刀を持った右手首の関節とその回転で巧みに受け流す。

と同時に、右足を踏み込み半身はんみになって間合いを詰め、既に振り

下ろされた坂出の太刀の鐔を左手で押さえる事により、坂出の二の太刀を封じて脇から心臓を狙い刺突する。

僅かながらも目に見えて力が抜け落ち、倒れ込みかけている坂出は恐らく虫の息だろう。

《おのれ、おのれえええ！！！！》

坪井は合当理ガツタリを噴かし、直進。一気に詰め寄ると同時に相手の小太刀を叩き落とし、返す刀で右肩を切りつけ再び上空へと騎航とぶ。

その風が今まで真打を隠していた砂煙を全て吹き飛ばし、その全貌を表した。

しかし、見下ろしたその劔冑の姿を見て坪井は訝しんだ。

相手の腰にある太刀があまりにも異様であったのだ。

長い、長すぎると言っても過言ではない。

見るからに小兵であろう仕手に対し、腰間にある太刀は優に三尺はある。その姿は、最早道化に近い。

そして、確信する。つい先程まで小太刀を握っていたのは、間違いない無く彼奴にとってそれをとっさに抜くのが容易ではないからだ。

家伝や急場しのぎの際に偶然にも見つけた劔冑だとするならばその身に合わぬ丈の太刀も領け、更に陰義が隠蔽、もしくはそれに準ずるものだとするならばそう不思議ではない。

野太刀を腰に差そうが抜くまで余裕を作る事は出来る。しかも、

相手の気付かぬ内に屠ることも可能だ。

しかし、何故に陰義シノギを、合当理を用いぬのか。熱量が不足しているのか、それとも未だ温存しているのか。後者は有り得ぬ事だ。

もしそうならば、何故部下を殺したのであろうか。

別に殺さずとも真打の速度、機動性ならば大抵の数打には劣る筈がない。尻追ドックフアイトい戦で適当に戦って相手を散らしてから逃走することも出来た。その気でさえあれば双輪懸で壊滅させる事として出来ただろう。

見つかる可能性を侵してまで斬ったのならば、少なくとも陰義を用いて、或いは合当理を吹かし逃走するのすら困難だと考えるのが妥当だ。

そして今、彼奴が手元には腰の鞘に納められた野太刀しかない。

これを好機と言わずなんと云おうか。

《友と部下の仇、討たせて貰う！》

真打に野太刀を抜かせるその前に動く。合当理を噴かし、再び降下、太刀を振り下ろす。手首に重い衝撃と共に太刀に火花が走る。

《ちいっ》

寸前で体を攻撃を最小限にする為に体を衝撃と同じ方向に動かし逃がしたらしい。肩を切り落とす程の勢いをつけたが、左肩部の甲鉄を砕いただけに止まっている。

しかし、彼奴は避けきれてはおらず。このまま仕留める！

加速をし下降、旋回、下降、旋回。十合にも及ぶであろう一方的な打ち込みは真打の甲鉄を見るも無惨に引き裂き砕く。

未だに原型を留めているのは単に真打劔冑の堅牢さがあってのものだ。しかし、仕手は異なる。その連続の打ち込みは熱量の尽きた身には回復する事が出来ず、内部に大小の切り傷、打撲を抱えているだろう。

《これでっ、仕舞いだあっ！》

先程の旋回よりも早い時点で向きを変えると一直進に駆ける。

秘剣『百舌哭』の変形型。

しかしその威力は決して変わることなく、その上地上にいる敵を射抜く分より有利性が増す。

貰った、坪井は確信した。その野太刀、抜く間もなくその命を散らす。己が未熟を呪えとすら言ってやりたい気分であった。

しかし、彼の予想は大きく覆される。

《えっ……？》

坪井は間の抜けた声をつい出してしまった。しかし、それは仕方

の無いことだ。仕留めた筈の真打に斬られ、仕留められた筈の真打は左肩に坪井の持っていた太刀が貫通してはいるものの無事であったのだから。

首を斬られ、思考が鈍る。何故、何故に斬られた、何故避けられた？

それは真打にも伝わったのか、ゆっくりと応えた。

《貴公の剣の技量は当方の及ばぬ位にあった。故に確実に来る機を先んじて読む為に敢えて斬られ、見切りやすい剣に変わった際に刀を抜いたまで》

若い、少年のような金打声エコーがかかった声はそう何事も無かったかのように言いのける。

我が家の秘剣を読み切るだと？自慢ではないがあの剣はそれこそ必死になってようやく会得したもの、そう易々とはっ……！！？

《……当方には貴公程の益荒男を苦しめる意図も理由も無い。必要なら介錯仕るが？》

命の刻限をとうに悟ったのか、一体何時納めたのか既に鞘に納めた野太刀の鯉口を切る。

敵に、しかも部下の、友の仇に情けをかけられるだと？

それをもし神が、あの世に在るであろう戦友が許そうとも、俺がそれを赦せるだろうか、否。

目が霞みかけているが気にならん。動くはあと僅かつ……！

《な、めるなよっ、下郎がああああ！！！！》

彼奴の小太刀を握ると今持てる全力を以て振るう。この身は既に勝利を望むのは難しいが、相討ちになれば不可能ではない。そこを狙う。

小太刀の迅さは太刀のそれを上回る。その理は何があらうとも覆る事はない。

そう、その理は何があらうとも覆る事は有り得ぬのだ。

しかし、この世には存在する。

武道に於いて最も必要とされる礼や誇りを取り払い、ただ人を殺すという行為にこそ重きを置く剣が。

人に忌み嫌われつつも恐れられ、憎まれつつもそれを人は羨望する。

人が邪剣、と呼ぶ存在が今、彼の目前に確かに存在した。

その術理を理解すると同時に、彼の右手の小太刀は振り落とされた。

小手を切り落とされずに済んだのは彼奴の剣を読む、彼の剣士として鍛え抜かれた目と勘によるものだ。

《……ハア、ハア、フウ。わ、るいが、貴様に、勝利は、くれてやるが、我が命、までは、貴様に、やらん。代わ、りに邪、剣使いが、

誇り、だけ、は貰ってゆく。その剣、六波羅が下に、潰えるをし：れ……」

何も言わずに真打劔冑の武者はただ黙したまま命が切れるその前、敗者である男の言葉を聞き、誇りを守る。

…南無。

事切れた相手に対し最期の礼。卑しき己が武を恥じるようにも見えた。

野太刀を再び鞘に収め、落ちた小太刀を拾い上げると再び殺した隊長騎の下へ近付く。

《……信くっ！？》

武者が何かを言おうとするのを一条の光が封じた。

《レーザー光線兵器だ！？》

流石に真打の仕手も動揺を隠せずにその場で身構えながら立ち膝になり隠れる。

距離は目測二〇〇、野太刀と小太刀だけでは仕留めきれはしまい。その前に撃たればそれで終わりだ。

乾坤一擲、人生最大の博打を打つ。掛け金は己が命。深呼吸をし、覚悟を決める。

《初代山城信國、推して参るっ！》

野太刀を足下へと向け振るうと同時に合当理を噴かす。

『なっ!?!』

一瞬、未確認騎^{てき}の意識が抜けたようなそんな気配がするが、すぐに引き締め、光が走る。

銃口を見切って避け、更に右脇からの切り上げで銃を払い落とした。

近くで目にした黒いそれは正しく異形だった。競技用^{レーサー}剣冑のような洗練さ、それでいて数打のような無骨さを持ち得ている。

しかし、何よりも彼の頭はこう告げていた。

これはこの世界の物ではないと。この世界にあってはならぬ物だと。

その勘を信じ、続けて払い落とした勢いを利用して切り下ろそうとするが、敵も慌てることなく右手を左手に付けられた棒へと向けそれを振るう。《があっ……、くうっ、っあ》

『くっ』

熱が左腕を焼く。しかし、彼の手の野太刀は確実に敵の胸部装甲を砕いていた。

『搭乗者ニ生命ノ危険トナル程の損傷ヲ確認。現世界ノ脱出ヲ優先。システムXNスタンバイ』

刀を通じて何かが聞こえる。

逃げようとするのかやたらに暴れる敵を逃がさぬように抑える。

彼にとって初めての数打以外の敵。それは未熟ながらも己が剣を試す良い機会だ。彼にはもうそれしかないのだから。

しかし、それは過ちであつたやもしれぬ。

《なっ、何だ…？》

赤い光が敵を中心に周囲を覆う。

不気味なまでの赤は血や夕焼けのような物とは違う。もっと人工的な無機質な感じがした。

背筋に悪寒が走る。しかし、逃げようにも体が動かなかった。熱量欠乏、地上故に気付かなかったそれは急に身に纏った物の重さを感じさせた。

光が、走る。それは渦の様に、それは荒れ狂う嵐のように二つの鎧を覆い尽くした。

そして、林は一瞬の後、再び静寂を取り戻した。其処には既に息在る者は既になく、ただ三領の劔冑のみがその全てを語っていた。

これは英雄の物語ではない。されど、悪鬼の物語でもない。

人に人以上の何者になることは出来ない。人を捨てようにも結局行き着くは所詮人。ただ生き方を選択する事ができるのみ。

これはただひたすらに、愚直なまでに剣にしがみつき生きた愚者の物語である。

えぬじー

刀を納めると強烈な閃光と地響きが周囲を駆け巡った。

…地響き？

『ぬぁーはっはっはあつ。ドクタアアアア、ウエエエエスト！！』

ギョギョギョギョギョインピョイーン。エレキギターの異様な音色が周囲の音を掻き消すように響く。

それは異形だった。身の丈40メートルはあろうドラムのような無骨な外見にあるのかないのか分からない足。そして、両手に付いたドリル…。つか、足よく壊れないな。つい現実逃避すらしてしまう程に規格外だ。

『ああ平行世界へ転移するとは我が輩の科学は魔術を超越したっ！つまり我が輩は人を超え、魔を超え、遂には神の域まで行くのか、ああ我が輩は己の天才っぷりが恐ろしい！ 後光よ、今なら我が輩を差してもよいであーる』

なんか紙一重とかそういうのを突き抜けちゃった感じの声がギタ

ーの音に混じって聞こえる。不協和音この上ない。

《…なあ、信國。おれはアレに勝つか引き分けないといけないのか？》

《…御堂。武の鬼道を歩む者の逃れ得ぬ運命、今がその時と存ずる。》

《いきなり真改ネタ！？　って、それはどっちの意味でだ！！！？》

《御堂よ、あと三ターンは待てば増援が来る》

《スルー！？　つかスパロボか！！　……待て、仲間なんぞいないだろう、今のおれには》

《第三軍だ》

《六波羅かよ！　畜生、もうヤケだ。やってやる！！》

《うむ、我と主たる仕手とに敵はない！　いくぞ、御堂！》

《デモべっぽくすればいいと思ってんじゃない！》

もうヤケクソになって騎航^とぶ。熱量は大丈夫かって？　まあ、何とかなるだろ。

『ぬうう、衆愚の分際にして超・弩・級、人類史上最大の大天才にして、神すらも嫉妬し平伏す頭脳を持つ我が輩ドクタアアア、ウエエエストの作りしスーパーウエスト無敵ロボ28号時空間転移装置装備型ゝああ、時が見えるゝに刃向かうなど63億年は未熟

！ 地球が生まれた時代にまで遡って隕石の衝突時代からやり直すがいいである！ そう、噴き出すマグマがあちゃあああ！ 熱い熱い！！！！』

『ドクター、只でさえ狭いコックピットの中で唾吐いてギターを弾くなロボ。ていうか、マジうぜーロボ』

『べどらぶっ！！！！？』

グチャっという何かが潰れた音が火薬の爆発音に混じって聞こえてくる。ああ、本編の方がいいなあと思いつながら心の中で信國の仕手は涙を流した。ギリアムさんならまともな付き合いしてくれるだろうに。次出るかは未定だけど。

《御堂よ、小太刀と太刀を使い！》

《な、何する気だ？》

《ゆくぞ！》

何とも嫌な予感がするが特に手はないので信國が示すようにする。備え付けられた重火器が放つ弾を回避して近づく。破壊力はあるそうだが単独の、しかも小型の物には当たらないようだ。そういえば、あのキ○ガ『ちがあああうっ、ちよおっぴりお茶目で地球が生み出した宇宙最大の逸材にして大☆天才、ドオクタアアア・ウエエエスト！ である。』∴ドクター・ウエストの操縦能力が高いのかどうかノベライズとコミカライズを見た限りは微妙な評価だったけど実際はどうなんだろうか、作者は意外と気になる。

接近した信國は二刀を下段から逆袈裟に切り上げる。二刀は十字に孤を描いて無敵ロボの装甲板を切り裂いた。

《クロス、スラッシュ!!》

をい、パクリだろ。最早突っ込む氣力が切れた仕手はもう何も言わない、というより言えない。

『ぐおおおう、お、おによれえ、ちょこざいな!!　メタトロンの技をパクるとは、こうなったら謝罪と賠償を要求した上で我が輩と無敵ロボ、そしてドリルの素晴らしさを十三時間の講義に、十時間の解説そして五時間のテストを含めた実践授業を以てその身に刻むがいい!』

ポチッ、怒りに身を任せてギターで怒りを表現する為に振り切った腕は何かのボタンを押したらしくはつきりと聞こえた。『…てへ♪ やっっちゃったぜ☆である。』

お約束の転移のお時間です。正直、これ以上書くとギリギリまでネタバレ隠したいこと出ちゃいそうだから。ここら辺で跳んでくれ。

《認めない!　こんなテキトーかつ無茶苦茶な扱い、ぜったいに認めないからなああああ……》

おわれ

始之事 逃走騎（後書き）

一応、序章は続きます。

こいつじゃない方の

主人公は二人の予定なんで

プロローグ 少女が見たソラ（前書き）

すいません、この前とはまた書き方が違います

元々はこっちを先に、しかも書きやすい書き方で書いてたのに遅れる…

いや、ホントにすいません

プロローグ 少女が見たソラ

この世界は異常である。狂っていると言ってもいいだろう。

しかし、一体それに何人もの人間が気付いて来ただろうか？ 強襲機兵や量子コンピュータを始め、まだ実験的ながらも作られているECSそれにブラックボックスだらけのIS。未だ不確定要素が多いISを除くこれらは確実に普及し、その発展は一年でも目を離すと全く別次元と言っても過言ではないくらいの発展をしている。

しかも、それに殆どの人々がそれに疑問を持たずに、だ。

人を最も容易に殺すことが出来る兵器、銃器すら発明されてからかなりの年月を経て今の形へと進化を遂げた。

火縄銃などからならば約六百年、火薬を使った弾を飛ばすという点で見ると八世紀末程まで遡る事が可能だ。

つまり、失敗作や奇形作も含めた、進化の樹形図のような過程を経て、ようやく今の形になったといえる。それを考慮すると今現在戦場で芽吹きつつあるそれはまるで時間を無理やり縮めて進化しているようにすら感じるのだ。

これから記す事も恐らくは数十年、いや数年のうちに来る―そして、恐らく前兆は既に始まっている。しかし、それは一体どうなるのかは分からない。

少なくとも神ならぬ身の私にはそれが審判の日の如き絶望を伴わない事をただただ祈ることしか出来ないのである。

ハンス・ガーフィールド著『時空間理論』序章より

暗闇の中、少女は虚ろな、何も映していない瞳を虚空に向けた。

あれからどれだけの時間が経ったのか、次にアノ男が来るのは何時なのか。お腹がすいた。

彼女の朦朧とした意識で頭に浮かぶのはそんな事だった。

普通の一般家庭の平凡な家にある小さな倉庫。それが今の彼女の世界であり、全てだ。

最初のうちは助けを呼んだり、泣き叫んだりしたが、ドアを壊すつもりで叩いたが、ドアはビクともせず、そして誰にも気付かれずに、ただアノ男から殴られて蹴られただけだった。

足を縛り付けた鎖がチャリチャリと鳴る。少女はこの音と重さが嫌いだった。

縛り付け、どこまでも邪魔と不快をもたらすそれはとても憎たらしかった。

寝転んで再び天井を眺める。

寝てしまおうにもこの空間でずっと寝ることすらも飽きてしまった。

臆気に死を感じた。しかし、それはここに来る前の恐怖や畏れが薄らいでしまったからだろうか。あまり怖く感じられなかった。

彼女は数ヶ月前までは普通の何処にでもいる明るく少しお転婆気味の可愛らしい少女だった。

しかし、今のただ震える事すら出来ずに真っ暗な部屋の隅にいるその姿は、過去の彼女を知る人間にはとって到底想像つかないものだろう。それ程までに少女は追い詰められていた。

すり減らした精神の中に浮かぶのは優しく、けれど気高い精神を持った強い父と厳しくも芯の強い、だけど甘やかし上手な母。

彼女は両親に会いたいと叶わぬ願いを虚空に向けて祈る。

もう一度、もう一度だけ。

しかし、空間は何も語らず、ただ沈黙を守り続けるだけだった。

目頭が熱くなる。しかし、涙が流れないのは本当に泣きすぎて枯れてしまったからだろうか。

苦しくて辛くてしょうがなかった。今の状態も、自分も。おとうさん、おかあさんと一緒に死んだらよかった。

やり切れない感情がしみの様に吹き出し、溢れそうになる。しかし、それでも涙は零れる事はなかった。

ふと、少女は気付いた、気付いてしまった。死人は泣くことはない、ならば今のわたしは間違い無く死人なんだと。

気付き、少女は何故だか胸の中のパズルに最後のピースが入れら

れるような心地になった。

だからこそ、まるで物であるかのように扱われるのだと。いたぶられ、苦しめられ、蔑んだ目で見られ続けているのだと。

ココロの何処かで納得してしまったのだ。

その認識は恐ろしく彼女を墮落させるに足る物だった。

自分の存在、価値を喪失した者は人間として生活する事は不可能とも言っている。

そして、自分という存在でありながらも、肉体と精神を切り離れたような状態すらも許容出来るのだ。

納得すると、彼女は笑った。壊れたといった方が近い。当たり前だ、誰もいない世界に救い主などはいない筈がない。

笑う、それに愉快さは含まれなかった。

笑う、それに嘲りはなかった。

そう、ただ笑っていただけだ。

そして、笑いだけが狭い彼女の世界を覆い隠し彼女はそのまま朽ちていく、筈だった。

それは彼女にとってみれば偶然だった。しかし、世界にはそれは既に起こり得るはずだった事のうちの一つの結果だったのかもしれない。

唐突に爆音が部屋を貫き、響き渡った。その次の瞬間、埃と共に激しい風と熱が中にあった荷物ごと部屋を碎いて荒れ狂う。

巨大な砲弾で撃ち抜かれたように吹き飛んだ荷物や床の木材、削れた家の壁が辺り構わず飛び交う。そこはまさしく戦場の様相だ。

怖い、明確な暴力として目前に現れた『死』に逆らうことの出来ない、根源的な感情が彼女を再び人へと戻した。頭を手で覆い、部屋の隅で縮こまる。

体中が震え、ただこの時が過ぎるのを待った。

怖い、怖い、怖い、こわい、コワイ、コワイ…。

目を閉じ、両手で耳を抑える。しかし、それでも音は止まない。

その内、体に何か重いものがのしかかって来るような感じがし、泣きそうにもなった。しかし、段々と物がぶつかる音も小さくなっていき、遂には何一つ聞こえなくなった。

終わった？

彼女はようやくやく閉じていた瞳を開き、周囲を見渡す。

体の上には筆筭が、それも部屋に残って僅かな壁に支えられる形であった。おかげで彼女が今まで酷い怪我をせずに、筆筭に潰されずに済んだ。それはまさに奇跡と言える。

部屋だった場所が所々火がついているらしく、熱かった。

目に入る光が痛い。長い間、光の当たらぬ場所にいたからか上手く目のピントが合わない。

歩こうと動く。鎖がチャラチャラなった。しかし、何時もの足を締め付ける痛みがまだ来ない。

霞む視線を足に向ける。足は付いている。しかし、その先は常とは異なっていた。

元々繋いであった物が壊されたのか、それとも爆発の際に千切れたのか、鎖はある程度の長さを残しつつも戒めは解かれていた。

枷の無い鎖は意味をなくし、ただ情けなく音を出しているだけだ。

やけに静かなのを不思議に思った彼女は辺りを見回した。

彼女の世界を壊したナニカは他の家突き抜け来たらしく、近くにあった家が童話の子豚の作った家のように吹き飛んでいた。

だというのに悲鳴も何も聞こえてこない。まるでこの世界にたった一人の人間になったように。

独りしかいない世界で、爆音が響く。空だ、彼女はそう思い上を見上げた。

眩しい、日の光は容赦なく彼女の目を襲う。未だに目が慣れない彼女には夏ではないといえども、南半球特有の強い日差しはひどくきついものだった。

ソラが途方もなく蒼かった。ぼんやりとしか見えなくても蒼空の色ははっきりと感じた。

そのとき、彼女自身蒼天を見て一体何を感じたのか、言葉にする事は出来ないだろう。恐らく一生かかっても。もしかしたら頭で理解してすらいないのかもしれない。

ただ、体を貫くような、体の内側から発せられたナニカが勢い良く体の中を駆け巡るような衝動。

気が付けば、彼女は泣いていた。声を張り裂けんばかりに上げて。

最初は感動だったのかもしれない。両親と遊びに行った時のあの日の空を思い出していたのかもしれない。しかし、しばらくすると何も心に浮かばなかった。

ただ、泣いていたのだ。

泣く。そこに歓喜はなく。

泣く。そこに憎悪はなく。

泣く。そこに悲壮はなく。

泣く。まるで赤子のように。

そう、今彼女は此処で再び生まれた。

戦火の吹き荒れる戦場の空の下で、彼女は今確かに生まれたのだ。

彼女の原初^{ハジマリ}の風景。それは安らぎとは正反対に位置する物だ。

しかし、それは決してなくなる事はない。愚かと分かっている
闘うという意志が人という生物の運命^{さだめ}だとするならば。

だが、それは明らかに人類が経験した事のない戦いだった。
そして、十年の時が経過しても尚、いやむしろ最悪の方向へと向
かいつつあった。

されど、彼女の物語の主役は戦いではない。

果てしなく広がる蒼空、大空を飛翔する翼…。

空の気流に乗りながら舞うかのように飛翔する妖精。

そう、それは夢。誰もが願い、夢見たソラ。

夢見る少女がソラノカケラを手に入れる物語だ。

そして、物語は201X年、現在世界最大の紛争地域―オースト
ラリアから動き出す。

不意に風が吹く。それは彼女には懐かしい太陽の匂いがしたよう
な気がした。

ティンダル飛行訓練校。ノーザンテリトリーに属する基地に今、彼女はいた。

幼くただ暗闇に怯えていた少女も今やその太陽のように明るい赤髪と勝ち気な強い意志を持った深海のような澄んだ――また別の人間はまるで鬼火と喻えるような――碧の瞳を併せ持ち、まるで全てを焼き尽くす灼熱の炎のようだ。

しかし、地下都市で見た空はやはり味気ない物であったからかどこか嬉しさに頬を弛ませる。

夢を叶えたくて此処まで走り抜けて来たのだからそれ位バチは当たらないだろう、そう思う。

気合いを入れその身に纏った軍服は一本の芯が体にあるような感覚。それは緊張なのかは分からなかったが悪い感じではなかった。

父と母に見せるつもりで空に向かって敬礼する。

「いってきます」 小さく、しかし固い意志で紡いだ短く言葉を口にして少女は微笑みを浮かべて基地内へと足を進めた。

プロローグ 少女が見たソラ（後書き）

これで導入終了！

今までののはスパロボαというSRXの戦闘シーンかガンバスターのチームの戦闘だと思って下さい

これからちゃんと本編に入ります、多分

世界観及び設定集（前書き）

！WARNING！

これから先にはネタバレ要素満載です
そういったものを好まない方は急いで引き返して下さい
まあ、主人公紹介ではないかと

世界観及び設定集

まず村正に関しては直接村正の作品自体とは絡まないから、オリジナルキャラと幾つかの原作キャラによるスポット参戦だと思って下さい

あと、雪風はジャム関連の設定と一部名称だけです
つまりISとフルメタル・パニックメインの時々オリジナルだと思っ
て下されば

では簡単な根幹設定：

アイエス
IS

殆ど原作通り

ただし随所にASの技術が持ち込まれている
しかし、この作品でもその高性能故にかなり制約が多い
もし、戦闘で使われるとしたら役割は戦略兵器

アームスレイブ

この作品ではマニピレーター、バイラテル角を用いた操縦など各
部でISでも使われている
原作より少し小型になっている

戦車以上にコスト（この場合は維持、生産などの合計でのコスト）
対効果が高く、ある程度訓練が短期間で済む事や人型故に多くの作
業を単機でこなせるなど利点の為陸上兵器の中では生き残った
言わば男の最後の花道
ちなみに戦術兵器

シンギ
陰義

単一仕様能力とは異なり、呪句の詠唱が必要

通常、仕手への陰義使用は他の劔胄の場合ならば劔胄の加護に無効されるもののIS、AS操縦者には有効

ジャム

白騎士事件直後に出現した人類の敵

しかしそれ以外、どこから来たのか、どうやったら倒しきれなのか、一体何なのかすら分かっていない

弱くもなければ強くもない（遺物となりかけの戦闘機や陸上用兵器で対処可能）が、学習能力の高さは人おろかコンピューター並かそれ以上とすらされている

しよだいやましろうのぶくに

初代山城信國

「天下一名物」相州五郎入道正宗の孫弟子であり、名門来派の系脈を受け継ぐ劔胄。

山城鍛冶の特長を残しながらも相州鍛冶の良点を持っており、後世では「正宗などが似せたるが如し」とすらされた。（勿論逆であるが、それ程の出来であった）

セントウキ

戦闘機

大抵の戦記物の主役で恐らくみんな大好き

これとデンジャーゾーンは好きな方も多いはず

その大半が白騎士事件でズタズタにされるだけで終わる筈であったが突如襲来したジャムによりその必要性が再確認され、オーストラリアや南米を始め南半球で活躍している

ツルギ

劔胄

ガツタリ

ホロ

原作通り合当理と母衣を使用する事で亜音速で飛行する事も可能なお、航空戦力としては破格の装甲を持つ

しかしAS程は力がなく、IS程の速さがない微妙な代物（前の2つと同じように分類するなら恐らく決闘用兵器）

量子コンピュータ

ヴェーダではない

この作品では主に对ジャム戦略の立案、決定から殆どの作戦、兵器開発まで関わるものを指す

ワン・オブ・アベリティー
単一仕様能力

ISとその乗り手が發揮する特殊能力

陰義と比べると無茶苦茶なものではないものの極めて強力

現在の地球

南半球はジャムの被害を受けて住めない土地が多い

特にオセアニアとアフリカは約半分がジャムに『侵略』されている
そのため、各国はISの登場で切り崩す（リストラする）筈だった
人材を国連平和維持軍の名目で投入した

それにより白騎士事件での経済混乱が少なく寧ろ戦争による特需景気による経済回復が発生

しかし、そのかわりに食糧問題が起きていて各国は睨み合いになっている

大国

アメリカは少し落ち目に

軍事会社のパニックは本来よりかは少ないもののやはり厳しい

中国はフルメタ設定なので大陸で中華民国と中華人民共和国で分かれている

ロシア、ドイツは…今現在は未定

フルメタでは其処まで出っ張らないし扱いが難しい…

後は大体ISと同じ

戦略兵器と戦術兵器

戦いには全局的な運用方法である戦略と方法である戦略と一カ所の戦闘での戦術の二パターンあります

しかし、実際の戦争では戦術的勝利が決して戦略的勝利にイコールである訳ではありません

例えるならばテストでいい点を取る、また将棋やチェスならば詰む（戦略的勝利）、とテストの問題の完答や板内で相手よりも多く駒を取る（戦術的勝利）ようなものです

確かに100点や全てを取れば勝ちにはなりますが、別にある程度の問題を解いて中間点を多く貰い、いい点をとるもしくは相手の隙をつき王手を連続したりする方が効率などはいいですよね

それに問題の完答に時間（戦闘での様々な条件）をとってしまい大した点数をとれなかったり、相手の強い駒、例えば飛車角を取ったとしても先に詰みになれば負けな訳で

要するにその戦術、点での勝利を担うのがASで、面での勝利である戦略的勝利に担うのがISだと思って下されれば結構です

更に平たく言うとASは従来の戦車や戦闘機でISは核とかミサイルと同じ扱いです

なので、やはり世間的には女尊男卑であるが、戦場ではむしろ男女平等の風潮が強い（というよりそうでないと士気が上がらない）となっています

ちなみに対ジャム戦は未だに有効な打開策がないこと、ISの使用によって一国（もしくは幾つかの国のみ）のISの兵器としての完成を近付けさせないという理由があり、各国はISの対ジャムへの使用を認めてません（アラスカ条約で正式に決定）

それ以外にもISは限界稼働時間が宇宙空間での活動ではあっても航空ではないこともあり陸上兵器に比べて短い事やそもそも倒してもゴキブリのように絶えず出現するジャムには一騎当千では対応が一時的にしか出来ないなどの理由が挙げられています

世界観及び設定集（後書き）

一話を書きながらこれ書き始めたのにこっちを先に書き上げるとかどうということなの…

で、でも一話のイメージは掴めていると思うので早くて2日遅くて一週間くらいで書き上げれる…といいなあ

毎週更新とかすげーよ、ホント

第一章 一話（前書き）

何とか書き上げた…

またどこことなく書き方が違うかも

よ、よろしければ是非とも感想を…

ノミの心臓の作者はこのまま突き進んじまえばいいのかこよなく不安だったりします…

第一章 一話

蒼天はあの日と変わらずにあった。雲一つない澄んだ蒼は来る者を拒まず、去る者を追わず。

それは非情なようでも、大器であるようにも感じる。そう、人類とは違うヤツらすらも受け入れる。そして、彼らのような居場所を失った者達も、だ。

『こちらホークアイ。ブラボー隊、聞こえるか？今そちらに中隊規模の飛行部隊を確認した。間違いなく、【奴ら】だ』

早期警戒管制機の『ホーク・アイ』が感知した敵を部隊へと知らせる。

『こちら、ブラボー・ワン。敵影を捕捉した。何時ものタイプ1、小型要撃型だ。これよりガンマ、ブラボー、デルタ各機は迎撃体制に入る』

男の声が淡々と述べる。しかし、その目には確かな戦意と闘志が灯っていた。

乾いたオーストラリアの空では航跡雲が目視しやすい。特に飛びなれた彼にはよく見えた。

確認すると彼は正面のHUD上に敵を捉えた。TDボックスが敵影を囲む。彼は口元を嚙猛に歪めると近接戦闘スイッチを素早くオンにする。

ヘッドアップ・ディスプレイ

『ブラボー・ワン、エンゲージ。エンゲージ、ブレイク。スターボード』

レーダーモードがスーパーサーチに切り替わっているのを確認。目標を自動ロックオンし撃墜する為に左旋回。相手の後ろを取る。

ターゲット・インサイト。HUD上にRDY AAM（レディ空対空ミサイル）の文字が踊る。トリガーを絞り、ミサイルを撃ち込む。短距離ミサイルはその白煙で弧を描きつつ着弾。一瞬、閃光が目を襲う。そして、爆発。

体にドッグファイトの時のGが心地良く身に染みる。撃墜した興奮と歓喜は胸の内のみに抑え、味方機の救援へ向かおうとした。

しかし、突如として電子音が狭いコックピットに響き渡った。瞬時に敵にロックされたのを確認。ブラボー・ワンは急いで回避行動に移る。体中の血液を含めた全ての液体が背中へ押しやられる感覚がするほどの急旋回。ブレイク、ブレイク！

しかし、それでもロックから逃れきれない。焦る心を理性が冷やし策を編み出す。

チャンスは一度きりだがあるにはある。どうせ死ぬなら奴らに一泡吹かせてからだ。ミサイルが発射されるのを確認すると、ダイブそしてチャフを散布。ミサイルが流れを変えたその瞬間にエアブレイキ、機体を上昇させる。

ロー・ヨー・ヨー。機体を見失ったミサイルは地に落ち、奴は動きを変えようとしていたが時すでに遅し。機体は既に位置エネルギーを速度へと変え追い詰める。

とった、そう思った瞬間更に加速。RDY^{レディ} GUN^{バルカン}の文字を横目で確認、機首の機銃が火を噴いた。黒煙が上がり、爆発。

身の危険が去ると同時に額や脇の下からヒヤリとした汗が流れ落ちる。後部席にいる電子オペレーターのリー小尉の声がいつもの軽口を抑えて僅かに震えていた。

「おい、小尉。大丈夫か？ いちいちこんなのに気にしていちや身が持たんぜ？」

慰めるように声を出来るだけ優しくするように努めた。しかし、それでも可笑しい。ようやく、彼の不審に気付く。

「おい、小尉！ 返事しろ！！」

「さ、サー！ イエッサー！」

怒鳴りつけ、ようやく小尉の声がいつもの通りに返ってきたのに少しの安堵が心に戻る。これ以上、訳の分からない敵の犠牲が増えるのは御免だった。

「あ、あの」

「どうした！？」

もしや、負傷か？ そうならば早く適切な処置をせねばまた空を飛べなくなるだろう。長い間、相棒をしてきた男を見捨てる訳にはいかない。しかし、この混戦状態で引き返すと味方機の危険が跳ね上がる。どうする？ ブラボー・ワンは悩んだ。

だが、その悩みも小尉の言葉で霧散した。それは彼の予想を遥かに上回る絶望だった。

「
」

「つはあ！！ ……ハア、ハア、……ふう。」

コールサイン、ブラボー・ワンであつた男は目を覚ました。

横にいる妻は未だに安らかに眠りについていた。未だ夢の中にいる妻を起こさぬようにベットから静かに起きるとコップに水を入れるとそれを飲み干した。

たった二年。それ程の時間しか経っていなかったのに遠い過去のようにも、つい先程のようにも思える。

それまでは彼は優秀ではあるものの、取るに足らないただのパイロットに過ぎなかった。それがあの戦場で生き残った、逃げたわけでないといえど仲間を部下を死なせた責はないと言い切れる事はない。

いや、むしろはつきりと死なせたといった方がいいだろう。

しかし、それを咎める事は誰もなかった。

あの戦いは特にこちら側の損害が大きく、その中で彼とその相棒、そして僅かに生き残った部隊を纏め殆ど損害を出さずに生き残った働きは奇跡とも言えたからだ。

しかも、機体の戦闘データは間違いなく残っており彼等が逃げ延びた訳ではないことは証明された。

それを知って黙っている上層部ではない。英雄として彼等を讃え、そして出撃して落とされる事で戦意を落ちるのを危惧した上層部は新たに対ジャム仮想敵部隊^{アグレッサ}を編成した。

友や部下と違い空に生きる身でありながら空に死ぬことを許されない己への憎しみとあの場で死ねなかった事への後悔、若者を殺す為だけに空へ上げねばならない自分を含めた大人への自嘲。

今の彼には生が既に地獄だった。何故こうなった？何が悪かったというのだ？あの日空を守りきれなかった後悔は奴らへの憎しみへと変わり、そして今、罪悪感からか妻の目すらもマトモに見れなくなった。

気にするな、と妻に泣きながら言われたが無理な話だ。

空戦は基本的に個人の技量で成り立ってはいない。チームプレイの重要性があればこそ混戦、乱戦になっても不安なく戦える。

即ち、空戦において重要なのは僚機の無事なのだ。その出来なかった彼に英雄の二文字は重くのしかかるのだ。

貴様にはそれが相応しいと。生き延びて周りの者が消え行く様をただ見るこゝしか出来ずに悔いればいいのだ、と。

けれど、それでも彼はこの地で飛ぶことをやめなかった。いや、やめられなかったというのが近い。

彼もここにいる大抵の人間と同じく今の社会に馴染めずにいる。女尊男卑でない場などここを含めた3つの戦場しかない。故にここを任期が切れ退役になることを皆極端に恐れ、退役の日には悲嘆し自殺する男たちも少なくない。

それは彼も同じだ。彼には空を飛べない人生は考えられなかった。出来れば死ぬときは空を望んでいたが、空を飛ぶことすら望めない世界など彼にしてみれば消えてしまえばよい物だ。

しかし、その地獄でも最悪の気分だ。地獄の下が実在した事に彼は神に問いたい気すら起きそうだ。

頭が痛む。昨日の寝酒が翌日まで響いたらしい。元々下戸で、飛行機乗りとして肝臓を含めた臓器は健康を保つ為というのも手伝わてあまり飲まなかったが、あの日以降飲まなくては寝られなくなっていた。

コップ一杯で酔える身であるから二杯は飲めば眠りにつけるが、昨日は珍しく三杯飲んだ。だからだろう、そう判断すると常より少し早めのジョギングへ向かうべく青空しか映らぬ空の下、男は走り出した。

教官が遅い。彼女ーレイナ・ファウラーはそれに大きな不満と少しの不審を感じた。

彼女は座学がどうも苦手だ。しかし、それが飛ぶためだというならば我慢していた。だというのにこれはどういう事だろうか？只でさえこの世の時間は有限であるというのにこの体たらく。

ママの胎内からもう一度やり直した方が賢明なのではないかと思っ
た。勿論、思うだけで口には出してないが。

ティンダル飛行基地。世界でも全滅危惧種に指定されそうな戦闘
機の訓練校にレイはいた。

あの日から空に憧れ、恋い焦がれ気が付けばここにいた。ミドル
スクールを卒業してすぐの事だった。

ISについても考えなかった訳ではないが、南半球の各国にはI
Sコアは支給されなかった。

先進国は戦闘機を与えたのだからそれに対する暴走の抑止力とし
て、という建前だが本音は少ないISの代わりにそれ（戦闘機）で
我慢しろということだろう。

別に空にさえいれるのならばそんな事は彼女にとって取るに足ら
ない些末な事だったが。

それにしても、遅い。一体何があったというのか。日系人の彼は
時間に厳しく、常に自他の時間のルーズを認めない男だった。隣の
机でギリギリで間に合ったものの飛ばし過ぎて疲れたのか寝そべっ
ている同じチームのピートなどはよく叱られている。

暇なので辺りを見回すとやはりレイと同じくイライラしているチ
ームメイトのイリスと逆に教官の身に何かあったのか心配してるで
あろうヒューイの姿も伺えた。

周囲を見渡すのにも飽き、退屈を紛らわすものもなくなり再びイ
ライラし始めた頃、ドアを叩きつけるような大きな音が廊下に反響

した。

「ドク！ もしくは衛生兵！ いないのか！？」

様子は見えないがかなり焦っている声。教官だ、一瞬誰だか分からなかったがヒューイのその一言で分かった。成る程、確かに聞き慣れた声だとレイは納得した。

いつになく緊張感の張り詰めた、しかしどこか迷子になった子供のような切羽詰まった声に常日頃の彼とはあまりにかけ離れていたからだ。

落ち着け、と彼の側にいる男が制する声。聞き覚えの無い声ではあるが、今の教官よりかは理性的に感じた。つついっ何をしているのか気になり廊下からチームメイトと共に様子を窺う。しかし、その光景を見た途端興味半分での気持ちは凍りついた。

教官の腕の中には血まみれの少年がいた。東洋系の黒髪に薄ら開いた虚ろに天井を覗く黒い瞳、その顔には血が足りないのか青白くなっていた。

恐らくはプライマリースクールの学生、もしかしたら東洋系は見ただ目より年を取っている場合があるからミドルスクールを入ったばかりか、入っていない位かもしれない。どちらにせよまだ子供だ。

何故かは分からないが、少なくとも大怪我をしており今その命が風前の灯火であることは分かった。

レイは見慣れた光景ではあったがやはり衝撃であった。誰かが死ぬ、それは今のオーストラリアではかなり身近で起きていた。戦死やジャムに侵攻され壊滅した街、この状況に狂った殺人。中にはド

ラッグの過剰打ちや飲み過ぎの急性アルコール中毒なんてものもある。

十年の時を経て正規軍の高齢化により傭兵を導入せざるをえないこの状況ではこれもその中のよくある一つなのかもしれない。極力顔には出さないようにするが、アレ位の年齢の子が死にかけているのを――しかも、何者かに殺されかけたのを――見るのは愉快ではない。

こちらに来てまだ数ヶ月しか経ってないアメリカ育ちのヒューイとピートには戦争を感じさせるそれは衝撃的だったのだろう。若干顔が青ざめ手が微かに震えていた。

イリスは何かあったのか、何時もの堂々とした態度が今は崩れ落ち何か嫌な事を思い出したかのような苦い顔を必死に口元を手で隠して誤魔化していた。

一同が何一つ動けぬまま、誰か――恐らくは教官の隣にいる男だろう――が知らせたのか担架を持った衛生兵が駆けつけ、血だらけになった教官から少年を受け取ると急いで治療室へと走っていった。

基地内の病院は病はともかく、外傷ならば簡単な治療から高度な技術を要する手術まで可能だ。

しかし、あれだけの出血となると危ないかもしれない。

教官は少年に付いていったのか、もう既にいなかった。辺りに残る鉄臭い匂いと廊下に垂れた血だけが現実だった事を証明していた。しばらくして教官は教室に入って来た。まだ顔色が優れないものの制服は血のついてない綺麗な物になっていた。

「では、この前の続き、暴風雨下における空戦機動の所から始める」
いつもと変わらぬ声。しかし、どこか意気消沈した感が拭えなかった。

結局、その日誰もあの少年について教官に聞く者はいなかった。

第一章 一話（後書き）

書いていて推敲する間にアレ？これISだよな、マブラヴとかでやれよって作者も少し思ったよ！

でも世界ではこんな感じになってる所もあれば平和な所もあるみたいな感じを書きたかったからあえて極限状態にしてみたぜ！

ちなみに例の暴走傭兵は数はそう多くないけど集団（というより部隊）で隠蔽してるからばれにくいしウザイというボトムズな連中まあ、出てこないけどな！

ちなみに活動報告では絶賛外伝・アフリカ戦線も公開だ！

作者のない脳みそをフル稼働しても空戦機動が書けなかったからストレス発散の為に書いたんだぜ！

こっちも宜しく！！

という訳でまた

第一章 二話（前書き）

すいません

かなり難産だったので今までの以上に駄文です

第一章 二話

ジェイムズ・カナモリは何時もより長い距離をジョギングした後、何時も通りに妻と朝食をとり基地へと向かった。

向かう、といっても地下にある基地と彼が住む居住区とをエレベーターで行き来しただけだが。

ティンダルだけでなく、大抵の街はそういった地下にある。しかし、地下にそのままビルや施設を持ち込んだようなので他国から来た者は住んで暫く経っても地下であるとは思わないとすら言う話だ。空の住民の彼からすれば最初は違和感を感じてしょうがないものではあったが、住み慣れるとどうとも感じはしなくなった。人間の適応力の高さを改めて実感する。

基地へ着くとジャムの新たに得られた空戦機動及び戦法の最新データをチェック、それへの対処法を量子コンピューターが選択し終えそれを確認すると、今日の座学に使う幾つかの教本を手にして上に向かう事にした。

これは彼の癖だ。天気や気圧をはじめとしたパイロットに必要な情報は軍が配布した携帯機器を使えば瞬時に分かるが彼は自分の目で風を、空を感じたいと思っている。

「よう、ジャック。また上か？」

地上行きのエレベーターへと乗り、IDカードと指紋認証を行う寸前によく聞き慣れた声が後ろからする。

「ああ、志水か。何時もの日課だからな。やらなきゃ体に狂いが出ちまうんだよ」

「お前の空好きも大概だな、羨ましくさえ思うね。まあ、地べたを這いずり回るのもそう悪くはないがな」

志水瑛太。民間軍事会社、平たく言えば傭兵派遣会社の事務と監督を務める男だ。

「ところで、何故ここにいる？いくらお前でも此処への立ち入りは禁止されてる筈だが」

声を下げいくらかの警戒を発しながら尋ねる。

当たり前だ。いくら地球防衛軍の様相があるといえども、機密情報漏洩管理はしなければならない。

特にオセアニアは西側に属する国しかないからか、ジャム戦だけでなく西側諸国の兵器の実戦テストも少なからず行われている。それもこの戦いが始まってから、つまり十年に及ぶ膨大な実戦データは最重要拠点である主要基地にて管理されている。

しかし、そうした実験を黙って指をくわえて見ているというのもどだい無理な話で少なからず東側からのスパイには悩まされていた。

そう考えるには不審な点があるが、警戒しておいて悪いことはない。腰のナイフ、それにホルスターに収まっているコルトは間違いない。手を持っている教本を投げつけてからでも構え撃てる自信はある。

「おいおい、警戒しなさんなよ。単に呼び出し食らったんだ。今日

の二三〇〇時に新たに納入されたM6三機にミストラル？二機、それにサーベージ（Rk192）の機体群の微調整に、人材の能力調査。これに付き合えてよ。ほら、これでいいか」

そう言つて手に持っていた書類を見せる。責任者である基地指令のサインに志水の印鑑。本物であった。

「たつくよお、一々そんな警戒する必要ねーだろーがよ。つか、俺から声かけたしな。まあ仕事の方もこんな感じで理解が良けりゃあな。じゃないといい加減にあのデカいだけの頭をスイカ割ったあとみたいにしてみたい」

「そんなに安いのか？」

「流石に正規雇用と非正規雇用を一緒くたにはしねえだろ。こっちも信用が第一じゃねえと支援受けねーしな」

壊れた時の修理費やらはあっち持ちだからまだいいか、と溜め息をつきながら苦笑する志水について謝罪するのを忘れ、同情した。

「で、外行くんだろ」

ニヤリと口元を歪ませ志水は悪戯を思いついた子供のような笑みを作る。

「なら、ちよいと付き合え。俺も久々に外の空気を吸いたいというのもあるし、何より今日使う現場を下見に行きたいしな」

カナモリ大尉は時計を見た。受け持つ授業まで、あと二時間。内容の確認は話の中でも読むことは出来る。そう判断すると彼は首を縦に頷いた。

大きく、必要最低限の安全だけが確保されたエレベーターが二人と一台のジープを載せ動き出す。核シエルター、防爆、防毒の役割を果たす装甲板を通り抜けて地上に出た。

基地の地上部は廃棄された格納庫や基地内、それに安全を確保した平地などへと繋がっている。一部施設は地下に移されていないから、全く使えない訳ではないだろうが、ガランとした滑走路以外には草原と牛しか見当たらない。

志水が運転するらしく運転席につくとエンジンが唸りを上げた。排気ガスが地下に残りやすいなどの影響で地下にはエレカーしかないからか、地下に住み慣れている彼には懐かしい音だ。

黙って助手席に座ると、手に持っていた教本の一冊に目を通しながら聞く。

「今日はどこのポイントでそれやるんだ？」

「ポイントD4だよ。多分前使った場所がばれんのを危惧してんじゃないのか？ まあ、こっちからしちやいい迷惑なんだがな」

愚痴を零す志水の言葉を聞きながらそのポイントを思い出す。確か、砂漠地帯の入ったすぐそばだった筈だ。

そんな事を考えている間に志水は顔を引き締め、真剣な雰囲気を纏っていた。

「……ついに米下院がこの戦いの費用削減の草案を提出する予定らしい」

「ようやく、か。長かったな」

さして大尉は驚かなかった。いずれかはそうなるだろうと思ったし、寧ろこの長期間の支援を続けて不満が良く出なかったとすら思うくらいだ。

「ああ、だがあの国は敵がいないと成り立たねえ国だからな。一応、東はかなり意識されてるだろうが、悪の謎の生命体よか目に見えて分かりやすい敵ではないわな。軍需産業やらは儲けてるからそうそうに打ち切るって話はないだろう」

彼もそれには同意だった。今の米国はソ連に『奴ら』と敵がいる。少なくともそれだけで軍需産業は安泰だ。

「しかし、それより問題なのが連中は厭戦ムードが高まって来ているっつーことだ」

ただただ損失される人命、未だに訳の分からぬ敵の正体、希望も先も終わりすら見えない戦い。

「恐らくSFのようなものにしか見えてないんだろうさ。奴らをどこかしらの国の新兵器なりインベーターなりどう思っようが間違はなく今この場で戦っているんだがな、俺らは」

苦虫を嚙んだように顔をしかめる。彼もこの地で少くない数の死を経験しているからこそその言葉なのだろう。カナモリと同じく憤りを感じ、それに加え彼の故郷を含めた国々に哀しみを感じているのかもしれない。

「また中東で騒ぎがあったらしい。大々的なテロだったらしく国連

の採択を得次第世界は動くだろう」

唐突に志水は話を変えた。一体何を言おうとしているのか分からなかった。

「時折、思うんだ。俺が自衛隊に入ってそれなりに経験した頃にある大統領がASを発表したんだ。あの時の俺はどう思ったか、分かるか？ 大爆笑だよ。同期の連中と腹抱えて机を叩いて笑ったよ。エイプリルフールか何かは知らんが少なくともジョーク以外の何物でもなかった」

しかし、と言葉を続ける。

「実際にそれが出来、しかも他国でも運用され初めた時はそうでもなかったが最近の進化に俺は恐怖したよ。まるで、漫画か何かの世界の夢を見ているんだってな」

少し言葉を切った。その時始めて、彼の表情が今まで見たことのない怒りと恐怖と不審を織り交ぜた顔をしているのに気付いた。

「最初、見てからほんの十年経つかそれ位の内にここまで進化してきた。しかも、第一世代と第二世代での格差は勃興期の飛行機とレシプロ機位の差はある。開発中のM9なんかはどこまで進化するんだ……？」

誰も答える事の出来ない疑問のみしか聞こえないような錯覚。カナモリも一言も喋らなかった。

何も喋れなかった。

「それにISだ。あんな馬鹿げた強さのデモンストレーションを見

せられて恐れない理由があるか？SFおろか子供の夢じみてやがる。それに『奴ら』……。まるで使い古した三文芝居のような現実だ。一騎当千の戦乙女に導かれて鋼の騎士達は悪魔を討ち滅ぼす、そんな物語を誰かが作っているようだな。今俺らがいる戦場ってのが異常で、西だ東だってやってるのにどこか安心を覚えるんだ。あの戦いこそ人間なんだと。『奴ら』との戦いはどこかおかしいと思うんだ。何か、人を変える。それも今までの、人類同士の戦いとは違った変わり方を」

彼の声が頭の中で反芻される。では、オレも変わったというのか？この十年の戦いの中で。

変わらずにいるとは言わないが大きく変わった事はない。自分を責めるのも元来の強い責任感からだろうと軍の精神科医に言われる事もあるし、そう簡単に人は変わる訳がない。

いやもしかしたら、気付いているのではないか？必要最低限の付き合いが更に減った。それだけではないだろう。気付いているのにそれを認めるのが恐ろしくてしょうがない、だから気付かぬフリをしているのではないのか？

外の景色を眺めながら考えている大尉の視界に一瞬光る物が確かに見えた。金属光沢？もう一度、注意深く目を見張る。キラッと光が目飛び込んできた。どうやら間違いないらしい。

しかし、謎だ。あそこには何もない筈。この付近は『奴ら』の制圧区域とは違う。しかも、ここに何もないことを衛星からの写真で確認したからこそ、ここを選んだのだろう。墜落した機体にしろその残骸は回収されるので違う。

疑問はようやく小さな人影が見えてから解決した。そして、それと同時に志水に叫びながら指示を出した。

それから遡ること約一時間前の事。

《……う。……み……ど……。御堂っ！！》

「……うん、つつ！」

村上泰征は肩の強烈な痛みと己を呼ぶ声で目を醒ました。

そして頭が正常に機能を果たすと、体の確認をする。

「そうか、肩に刀刺さりっぱなしだったな」

《何を呑気な……》

実際はそれなり以上に痛いのだが、どこか他人事のように聞こえたらしく、呆れたような口調で語る金打声がやたらと人間臭く感じて苦笑する。

本来、戦闘補助のOS（統御機能）に過ぎない筈のそれは機械なよりも遥かに人間らしいと言えるだろう。

少なくとも目に痛い金属光沢でチカチカする上にやたら熱が籠もって暑苦しい体を近付けなければ、だが。

その熱さで火傷しない内に起き上がる。何せ、身の丈ほどはある金属製の黄金虫だ。熱の籠もり様は考えたくはない。

そして、辺りを見回す。闘いの際に頭でも打ったのか、何やら先程まで見ていた筈の光景とは明らかに違う。

果てなく続く岩肌をそのまま水平にしたような、そんな光景が少なくとも彼の見える限りは水平線までそれが続いているように見えた。

「……信國。のぶくに己おれは出羽の山中にいたよな、間違いない？」

《肯定。しかし御堂、この風景は大和かどうかとも怪しいと存ずるが》

ふむ、と同意するかのように相槌を打つ。

「とりあえず、此処が何処であろうとこいつは抜かなきゃならんだろう。信國、まずは小太刀を」

《承知》

ここがどの様な土地であろうと今の彼には左腕の様子が何よりも気になった。

黄金虫が主の名に従うと、体から一尺八寸程の小太刀が引き出される。

シャツの袖を軽く切り、それで太刀の刃を押さえるとそのまま小太刀をくわえ、一息つく。

そして、他の無事な組織を傷付けぬように慎重に、されど大胆にも一瞬で太刀を腕から引き抜く。

「ん、つあッあああああ！！」

言い難い痛みをこらえると抜いた時に使った袖を無事な右腕と歯を用いて左腕の患部をきつく結ぶ。

痛みに一瞬視界がぶれた。いや、もしかしたら抜け過ぎた血が原因なのかもしれない。

どちらにせよ、そう長くは動けまい。なるべく早く行動せねば、それだけが泰征の頭をよぎった。

「……のぶっ、くうにつ……。っ……。周りに、てきが、いるっ、か？」

《不明。しかし、距離三〇〇〇に建築物を確認した》

そいつは重畳。ならば、行くしかないか。落ちていた刀を杖にする。小太刀では短く、野太刀では長過ぎるだろうがこれなら問題ないだろう。

「っ、行くっ、ぞ」

痛みで切れ切れになる言葉と意識を必死にかき集めて歩く、歩く、歩く。しかしその間も日の光は泰征の水分と精神を、流れる血は彼の体力を奪い続ける。

死を感じる。後ろに死神が微笑みを浮かべこちらを見ているのを感じる。失せろ、口に出さぬが殺気を放つ。

死にたくはない。死ぬ訳には、いかない。まだだ、まだ約束を、そして己の誓いを破る訳にはいかないのだ。そのために生きる。血

混じりの泥水を啜り、死肉を喰らい、悪魔よ、人非人よと呼ばれようとも構わない。

剣を極め窮めてその果ての武の頂へと、武の神髄を手にするまでは死ねないのだ。

先程から視界が霞み始めてきていた。まだ、なのか？ 口にはしないものの焦りが底なし沼のように少しずつ心に浸食してゆく。倒れそうな体を必死に刀で支える。

動かぬ体を無理に動かそうとしたからか何度か転びそうになっていたが遂に崩れ落ちた。

死にかけの身にはもう起き上がる体力が残されておらず立とうにも殆ど体のどこを動かすにも他人の体のように何一つきかなかった。

もう何も頭に浮かばない。ただ消えるのを待つのみ、最後まで死神に身を許す気にはならんもののもう間近にいるのは分かる。

瞼の重さに負け、ゆっくりと瞳を閉じる。しかし、それでも必死に足掻いた。死など甘んじて受けるものか。体が死のうとも魂の一片としてそう簡単にやるものか！

命を懸けた抗いをしていたからか、すぐ近くで叫び返事を待つ男がいたのに泰征が気付く事はなかった。いや、正しくは気付けないほどに消耗していたというのが正しいのかもしれない。

しかし、その執念こそが新たな剣の道を開くきっかけとなる事をこの時の泰征は知る由も無かった。

第一章 二話（後書き）

お付き合い頂き有難うございます
そしてどうもお疲れさまでした
感想、批判をお待ちしています

第一章 三話（前書き）

まず、こんな意味不明を二乗して重ねがけした上に半ばノリを足したような作品を待っていて下さった神の如き器を持つ読者様へ

遅れて申し訳ありませんでした

そして、その中の篠ノ之箒ファンの方、重ねて申し訳ありません

今日誕生日ですが特に何も用意がありません、しかも先程誤字出しやがりました、このへっぽこ作者はもう謝れるに謝れる限りでございます（日本語が可笑しい気がしないでもないですが気にしないでやって下さい、いやホントに）

……こんな拙作ですが楽しんで頂けたら幸いです

第一章 三話

「…ん？ ああ、そうか」

拾われた時の夢か。そして、今のおれは船の中か。

今まで寝ていた硬めのベットに少しの違和感を感じたものの自分の今の現状を思い出して納得した。

来た当初は自分が大和で長い夢を見ているのだとすら思っていたが、こちらで負った傷や苦い経験は紛れもなく現実であった。その事実には半ば狂いそうにすらなったこともあってか、必ず自分の状況を一度頭で整理するのが癖になりつつあるのに苦笑した。

彼にとって、この現実もあちらで起きた出来事もどこか夢のように、夢であって欲しいように思っている事を心のどこかで願っているのだ。

なんと愚かで、なんと情けない。己が心の弱さに苦虫を噛むような思いだ。

半死半生、もとい死にかけ寸前の所を拾われてから早二年。あれから怒涛の如く濃密な時間を過ごした。当時、今の養父の下で習っていた男女も今ではかなりの腕前で部隊指揮やトップガンとなっているとのこと。光陰矢の如しとは先達の言うことは的を得ているとつい納得する程だった。

そして、今彼は太平洋を渡り日本へと向かっている。

事の始まりは至極簡単なものでこれ養父のジャックが今のオーストラリアにいるのを良く思っていないことにあった。

勿論彼の持つ『劔冑』という現行兵器とは異なる超兵器を個人である彼の所有物であるという事で他国から狙われるというのも危惧したというのもあるだろう。紛争地域にいるという事は即ち死を偽装して拉致する事も容易でありそういった可能性を減らす為でもある。

しかし、それ以上に彼が戦場に住まいとし劔を振るいたい。それが無理だとしても戦場にいたいと思い、同じく命の恩人である瑛太の下でこっそりとA Sの操縦を教わった事がばれたのが大きな要因であった。おかげであちらでは知り得なかった銃の使い方や集団戦法、そして幾つかの戦術理論を学ぶことが出来たが、それでも戦場を離れるのは彼にとってあまり好ましくはないことだ。

仕方がない、泰征は一人納得する。必要最低限の過去とあちらの世界の一般常識（大和の中だけの常識であるが）しか話してない故に彼の行動は戦争や戦いに懂れてる子供に過ぎず、決して他人から見て好ましいとは思えぬだろう。

彼とて争いの浅ましさや彼のいる劔の道とは悪意と泥臭く卑劣に満ちた道であり、それでいて永く駆け引きと騙し討ちと共になければならぬ道だということもよく知っている。

如何なる理由があろうともやはり人を殺すのに罪を何かを感じぬというのは人としてあってはならない。そして、ただ人を殺す事を極めんとする武術こそ、人を殺すのに何も感じぬようになりえる者を作りし武術こそ、決して許しては赦してはならない。

だからこそ、剣客ならば身につけたいと思うのだ、あの境地を……。そう思うと泰征は嘲った。

当たり前だ、彼の往く道は外法すら厭わぬ道。ならば無想の境地へあろうと願うのは滑稽な話だ。

剣は道具に過ぎぬ。剣は術に過ぎぬ。使い手によって始めてその意味が為されるのだ。

ならば彼の剣とは？ 決まっている。最強を、何人にも侵されぬ無^{ぜっ}双^{たい}を得るための剣だ。

なら今すべき事は決まっている。あちらの世界に帰るより我が身を鍛える事だ。如何に劔^{うま}冑が良かろうとも仕手が駄目ならばそれは駄馬にしかなるまい。

この二年鍛錬を忘れぬ事はなく、また『彼奴ら』と幾度か戦い密かに技を磨いてきた。

だがまだ、まだ足りない。足りる訳がない。あれには、あれを得るには圧倒的に足りなさすぎる。経験も鍛錬も技術も全て。

この世界では中々互いが近接戦で闘うという機会を得れず闘えたにしろそれは人型とはいえ遅く、それに剣を打ち合うのには適していなかった。当たり前といえば当たり前の話だ。こちらの世界と彼にとって本来いるべき筈の世界とは異なるのだから。

集団を一個の巨大な生物のように扱う戦法、それ自体はあちらにも無かった訳ではない。特に、新撰組は気組とそれとに重きを置き、数多くの志士等に恐れられていた。しかし、こちらのそれは新撰組

や近代に苦心して生み出されたものを遥かに洗練、熟達されており文字通り一つのものとして動く。

恐らく此処まで大きく差が出たのは古より劔胄という存在があるか否かという事だろう。劔胄と戦うというのは蟻と象、いやそれ以上の差がある。古来からの劔胄が多い国こそ強いのは1930年代になっても変わりはない絶対的な普遍的な事実だ。つまり、劔胄に勝てるのは劔胄しかない、この条理はあちらの世界では常識であり、必然だった。そのためか、古来から続く一騎打ち（ブルファイト）こそが誉れにして基本であり、戦車や飛行艦は『劔胄に対等に闘う』ための兵器という部分が大きい。

だが、この世界には劔胄がない。即ち、銃や刀や槍やらその他武器はただ『人を殺せる』だけで事足りたのだ。だからこそ多数対多数で有利になるように集団での戦闘を研鑽し、また少ない戦力で敵を倒すための兵器を生み出した。

しかし、それは彼がこの世界で見えたものとは一線を画すとはこのことかと認識を改めるほどに違った。IS、映像で映し出されたそれを見た時、泰征の心が震えた。

劔胄では不可能な騎航^とび方、圧倒的で何人にも触れることすら叶わぬ攻撃力、堅牢な城塞の如き電磁障壁^{エネルギーシールド}。

全てにおいて劔胄を勝るとも劣らぬ力に血が沸き、心が躍った。

どうやって戦うか、どうやって斬るか、どうやって倒しきるか。それを考えるだけで楽しかった。しかし、それだけで満足出来る訳がない。死合いたい、切り結びたい、闘いたい。その欲望が胸を占めるのにはそう長い時間はかからなかった。まだ恋を知らなかつ

た少年が突然の恋に出逢ったようなもどかしさ、苦しさで心が焦れ続ける日々を重ねた。しかし、それは叶わなかった。叶う筈などなかった。

当然だ。幾ら貴重であるといえど劔冑は量産が効く。(もつともこの世界では作れるのかどうかすら分らないが。)この世界の数多の兵器はそれがより顕著だ。誰もが扱え、誰にでも使える武器こそが優秀であるこの世界では。しかし、ISはその作成に必要不可欠なコアなるものは作れるのはISの開発した篠ノ乃東なる者が作った四六七個のみでありそれ以上は作ることおろかその構造すらマトモに判らぬままだというのだから。

おかげで彼の想いは片思いだけで終わる……筈だった。

しかし、彼にとって幸いな出来事が起きた。なんと受け入れ先である彼の故国とよく似た国——日本が彼の受け入れに難色を示したのだ。

理由は簡単だった。瑛太が自身の持つ人脈と劔冑の情報を(勝手に)使って『十年前の争乱に巻き込まれてしまいそこで生活していた記憶喪失の日本人』という立場を得たものの、かといってこの国の一般常識を遥かに逸脱した存在であることには間違い無い。

そんな人間が何事もなく日本の土が踏める訳がない。良くも悪くもマスコミに悪いイメージを持たせるような記事を書かれるとようやく安定した支持率がまた下がる。それにそこから法案を出すのもまたその内容への質疑で時間の無駄になる。捻れ国会になりつつあり、連立してようやくの状態である程度の今は下手に地盤を揺らす小さな地震が大惨事になりかねない。

かと言って手放す気にもならなかった。彼の持つ正体不明（という事になっている）の兵器、劔胃の能力は未知数である。ISに代わる戦力とまではいかないまでも単体戦力という意味では脅威である。それもIS以上の貴重な品だ。唯一無二のそれを手元に置いているのに手放すのは言わずもがな愚考だ。

そこで考えついた策というのがIS学園に勤める、というものだった。IS学園は完璧ではないが各国からの外的介入のない言わば超独立教育機関である。ギリギリ一八歳である彼だから可能であるし、何より報告では女性に免疫がなく苦手意識があるとの事から間違いを犯す心配もないとの判断だった。かなり何かが大きく問題があった気がしないでもないが、ある種の奇跡にすら感じられる話にいるかどうかは解らないが少なくとも此方の神様は存在を信じてもいい気すらした。

船が波に浚われそうになったのか僅かに揺れる。しかし、それに揺らぐことない彼の意思と炎のような彼の闘志は小さな個室で微かにしかし確かにはつきりと燃えていた。

この先、考えにもつかないような苦境や痛み能耐え生き長らえる生だ。その一步は既に進んだ、ならば歩みを止めずにただ進むのみ。虚空にある何かを掴んだ彼は決意を固めると、突然下を向く。

「くっ!!?」 またか、顔が引きつり意識があやふやになる。必死に重い体を持ち上げると、その足がある場所へと向けた。急いで向かい其処に辿り着くとそのまま——吐いた。

「おっ、おええええええ、かつ、けほっ、ごほっ」

一通り吐き出して何とか息をつけるようになった後、この世界には飛行艦が存在しない事を心底憎みつつ、彼は一秒でも早く着くことを涙目で願っている。とまた揺れが酷くなって不快感が増し、また口からナニカ大事なものと一緒に狭いトイレの中、ぶちまけた。

「レイナ・ファウラー小尉。貴官はこれよりアメリカのL社のオーストラリア支部特殊研究課へ出向し、テストパイロットとなることを任命す。」

いきなりの辞令にレイナ・ファウラーは暫く呆然と佇んでいた。訳が分からない、一体何をしたというのか。少なくとも、不平不満は同僚も少なからず言っていたし、基地指令のカツラを隠したのは彼女は周りを扇動はしたものの決してパソコンに隠してあった盗撮画像が偶然発見され、あのハゲの司令が懲戒処分まで行くとは正直予想外だった。

しかし、営倉3日の罰則は受けたし司令というトップの犯罪行為が日の元に曝されてしまった為にそれ以上のお咎めは無しだったはず。

しかし、よく考えてみると悪い話ではない。むしろ、この待遇は好待遇だろう。元々、集団戦法での航空機動よりも単体でのドッグファイトを得意としている所もこの状況は有り難い。

早い話、あまりにも旨すぎる話に頭が何かしらの陰謀か左遷的なナニカを意味しているのではないかと考えているのだ。でない心の安定が測れない、そんな気がしてしょうがなかった。

そして、そんな彼女の不安はいやな、そう実はいやな方向での中

する事となる。

航空母艦、空飛ぶ要塞の名に恥じないその巨体はまさに空飛ぶ艦だ。

地上でも中々にお目にかかることのない存在こそ有名である不可視のそれを眺められるとは、短いながらも軍にいる身にとって超最高機密の塊を眺めてられて嬉しくない訳がない。まるで自分の旅立ちを祝っているかのようにも見えたからだ。それにこれからの事を考えるとどこか期待に胸を膨らまさずにいるという方が酷な話だ。

無理もない。N社といえば、B社と同じくアメリカ軍需産業の要の二社だ。昔日の世界を冠たるとまでの勢いはないまでもやはり腐っても何とやらという奴で航空関連のノウハウに関して見れば世界でも屈指の集団がいて考えていいだろう。

空が飛べるなら何でも良かったが、最新鋭でないにしろ実験機とこののには興味がある。

しかも、この国にわざわざあるのならば実戦かそれに準ずる装備を搭載した実験になるものだろうから尚更だ。

地上に出てしばらく待つ。確か、ここで待つようにと辞令には書かれてあったが特に目立つような物もない。というより滑走路のど真ん中。なにかしらあったらそれはそれで問題がある所だ。

久しぶりに日光が体を照らす感覚を味わう。懐かしさを感じるものの心地よくはない。仕方がなしに胸ポケットに入っていたサングラスをかける。

レイバンやニコンではなく安物のサングラスではあるものの少しくらい風格みたいなものは出ているだろう。

重いスーツケースに腰掛けると、深呼吸。変わることなく空がある事に安心した。

あの日から、いや遙か昔から空に散った無名の戦士達の声が、恐怖と苦痛とに満ちた世界への怨みが、誰かに明日を託して風へ、翼へとなった者達の心の叫びが聞こえそうなのに聞こえない、その事への哀しみと安堵なのかもしれない。

そんな忘れられる事への悲しさを思い下を向いた。強くなったつもりだった、自由になれたつもりだった。なのに、なのに初戦では隣の仲間を飛んでる内に落とされ、命を散らせるのを黙って見る事しか出来なかった。その後も生き延びて、あの部隊の誰それが死んだというのを黙って聞かなければならない。

それが嫌だった。あの監禁された時と全く変わらない無力な自分を見せつけられているようで。

その誰かが死んだのは決して自分のせいじゃなくてもどうしても考えてしまう。

ふと、過去の教官の顔が浮かんだ。あのどこか達観したような眼差しは幾つもの仲間の死を乗り越え、そしてそれをただ見送るしかない絶望を宿していたのだろうか。

暫くそんな憂鬱な考えになりかけた自身を叱責すると、今まで日に照らされ続けて暑くなりかけた背中が僅かに涼しく、足下の地面

が先程まで白くしか見えなかったのが本来のアスファルトの黒っぽい地面へと色感を戻していた。

日陰？ そうだとしたら若干説明がつかない。この基地を含め、大抵は戦闘機を始め、輸送や救援でも飛行機を用いるのが基本だ。

『奴ら』——一般的にジャムと呼称される知的生命体はなぜ戦闘機系の兵器を用いて戦う。それよりも遅いヘリでは軍配はあちらに上がるし何より大量の運送には適していない。

つまり、僅かに感じるかどうか程度の時間しか留まることは出来ない。なら、一体？ 風の中から微かに風を切る音をレイの耳は確実に捉えた。ならば、ヘリなのか？

そう思い、上を見上げる。そこにはヘリと呼ぶには到底有り得ない、漫画かSFのような巨体と左右に取り付けられたローターの化け物があった。レイにはヘリと呼んでいいのか一瞬迷ったが、それよりも興味にも似た疑問が頭に湧いた。何故ここに、いやそれよりもどうやって此処まで音を消した？ その胸の内の疑問に答える者もなく、ヘリはゆっくりと着陸した。

「レイナ・ファウラー小尉でよろしいですね？」

ヘリから出て来た人物の声が最小限の風切音に混じって聞こえた。彼女は一瞬呆気に取りれていたが、それを悟られないように黙って肯定の意を表すようにゆっくりと頷いた。

「そうですか。では乗って頂けませんか？ 大変申し訳ないのですが時間が大分と押してしまして。いえいえ、必要最低限のものは先に準備なされているでしょうし、何か他に必要なら経費で落とせる

でしょうから。」

こちらに何か言わせる間もなく片手で彼女を押すようにエスコートし、もう片手で彼女の用意した荷物を運ぶと何一つマトモに会話もないまま、レイナは訓練校以来長らくいたティンダルを感慨やらを感じる間すらも与えられずに離れた。コレ、拉致されてるんじゃないか？　　と思いつながら。

『は？』

遠く、日本とオーストラリア上空という隔てた空間であるものの同時刻に二人の男女が呆れを含めた声でつい聞き返した。

相手は今や急成長を遂げる飛ぶ鳥を落とす勢いのIS学園の学園長と片や落ちぶれかけで斜陽化しつつあるアメリカ大手軍需産業系列のG社オーストラリア支部の一責任者の違いがあるが。

にこやかな笑顔の前に若い二人には何か有無を言わせぬ迫力を感じさせた。

『ではもう一度言わせて頂ます（な）。』

「村上泰征さん、あなたにはアリーナの修繕及びに管理の業務を担って頂きます」

「フアウラー小尉、あなたは『最強の翼』に興味がありますか？　いやいや、興味などは別に後からでも嫌でもついてきますよ。戦闘機乗りがアレを見ればね。少なくとも今現在我々はその開発を目指しており、そのために貴女に協力してもらいたい」

第一章 三話（後書き）

楽しんで頂けましたでしょうか？

感想、批判、その他評価悪評など全て受け止める所存ですので
どし送って頂けたら、と思っております

第一章 四話（前書き）

すいません、更新やはり遅いですね

それでも拙作のような作品を読んで下さる方々有難うございます
感想をと言いたいところですが既に読んで下さる方がいる
有里は果報者です

第一章 四話

第四アリーナ。そう呼ばれる広大なスペースはISによる実機訓練により荒れていた。といっても超低空飛行、もしくはホバリングによって回避または地面に落ちた際に決られた地面のみでそれ以外はアリーナの遮断シールドにより全く損傷一つない。要するに地面が爆ぜただけだ。砂漠地帯、という条件なら戦闘後とも言えなくはない。

そんな中、IS学園には馴染み深くそれでいて浮いた物が慌ただしく稼働していた。M6―ブッシュネルと称される機体はローラーを引きながら歩く。本来の意図から大きく外れた運用のされているその光景はもし愛用している傭兵や軍人が見れば憤慨し、場合によっては卒倒しかねないものであるが、現在それに駆る側にとってはそんな些事は興味なくどうとも思っていない。今、泰征にあるのは心からの失望と拭えぬ不快感だ。

学園側にはどういう情報が流れたのかはいまいちよく分からないもののASの操縦が出来るが、平和かつ安全な状況で長い間生活してなかった為マトモにこの国の常識が分かっているというのは伝わっていたようだ。

それは幸いにも長らく放置されていたASの画期的な利用方法を考えていたらしい。ASはつまり所人型である。つまりは人と似た動きや人のような様々な運用も可能にしている。例えば震災などの際には重機の持ち込めぬ場所へと行き瓦礫を撤去したり、南半球にいた頃にはアフリカ戦線では航空戦力の不足を補う為にもASで巨大な塹壕を作り、対空防御を図った、という話も耳にしていた。

だが、コスト削減策として本来防衛用にあつたASを重機替わりにアリーナの整備に使うとは誰も考えなかった。というよりはそんな発想は普通出ない。

要するに今の彼はどうあつても闘えないのだ。あれだけ焦がれ、待ち望んだのにとんだ無駄足になったのだ。例えるなら、必死になつて少ない小遣いを貯めてようやく目的の物を買おうとした時にそれが売り切れる、そんな気持ちだった。

それだけならばまだ良かった。その後、ここへ来るまでの道での視線、多少の興味を含んだ同情は彼の心を澱ませ、曇らせた。それは彼には剣を握り、戦える状態でありながらISと闘えぬ事よりも大きく心を不快にさせた。

他人に同情するというのは意識的、無意識下に問わず人を己より下に見ているからこそ、そうする。誰それは辛い過去をおくってきただから可哀想だ、誰それは痛々しい傷を負っているだから不幸である、というように。

その人物は確かに不幸であるかもしれないが、それは本人の感じ方によつてのものであるし、ましてや人生や生まれなんぞ別に誰かと比べる為のものではない。あいつより自分の方がマシな生き方をしている、あいつの方が悲惨な生き方だから自分はそうならず良かったと安堵し、その者の人生を軽んじ、侮辱する事など許される事ではない。即ち他人の安い同情はその人物の人生の否定すらも微かに交えているのだ。

しかし、そんな深く考えている訳ではなくただ鬱陶しさに苛ついていただけであるが。安い同情を受けたことも多少はある。それにこの世界に来てからの事、今までひたすらに見られるのは病院にい

た時くらいだった故に慣れていない。確かにそれもあるが、何よりもこの間に誰かに己の剣を見られるのが嫌だった。

剣とは秘匿にも重きを置く。無闇に極意を教える事も出来なくはないが、其れは編み出された技法を破る術を与える事にもなる。一子相伝や僅かな者にしか秘剣を授けぬのにはそういった理由があるのだ。絶対に最強の技はない。いずれかは其れが破られる事になるだろう。しかし、それでも幾らかの時間を延ばす事は出来る。だからこそその秘匿であるのだが、四六時中見られてはそうもいかない。かといって剣を振らねば腕は落ちる。彼には見事な誤算であり、困った事態だった。

ただこの世界での生活には特に不満はない。それに、六波羅が力を傘に威張り散らすようになった後を考えるとそう悪くはない。いや、むしろ良いだろう。少なくとも、政府はかなりの自由を容認してはいるし、圧政によって死ぬような事はなかった。

国によつては未だにそういったものを布く国もあるかもしれないが、少なくとも戦場にいた則ちそれ不幸という法則は自分の場合は間違っている。むしろ剣を極める良い機会だと喜々として戦いにその身を投じていたのだが、住む世界が異なると考え方もやはり異なるようだ。

しかも、この学園は男性というのが絶対的に少ない為か、いろいろな注目を少なくとも、此処にいる間は尋常ではなく浴びねばならぬらしい。その証拠に先程から暇なのかどうかは知らないが、アーナを見つめる視線を感じる。まだ殺気や敵意の満ちたものではない辺り、監視かそれとも単純にこの学園では珍しい若い男性職員に興味があったのか。どうであるにしろ新学期が入るという後2日は希望で残っている者以外はそういないが、それ以降はどうなるのや

ら。

どうであるにしろ厄介な所へと来てしまったものだ、肩まで伸びた蓬髪を掻きどこまでも深い溜め息を吐いた。

織斑千冬はここしばらく周りの職員おろか知人全てが見たことの無い位に神経を尖らせていた。それはこの学園にいる者ならば多少なりとも予想はつく。織斑一夏、世界初の男性IS操縦者にして彼女の唯一無二の親族の存在だ。

女性しか使えないISという業界の中で一夏は言うなれば特殊な人材だ。その貴重さは全世界の男性の中のただ一人しか持たない技術である。故に各国及びIS研究機関から様々なアプローチでの勧誘があったし、今も少なからず存在する。

それを全て跳ね除けるというのは勿論日本政府の警護の優秀さもさることながら、やはり引退した現在もなおIS最強と目される『ブリュンヒルデ』たる彼女の睨みが効いているのもあるだろう。（実際には彼女の親友にナニカをされるのが恐ろしいのも含まれているだろうが）

しかし、その彼女が更に頭を悩ませるのが今彼女の視線にある鉄の巨人の操縦者だ。

村上泰征。現在一八歳で出身国日本、五歳の時、両親とオーストラリアに旅行中『ファースト・コンタクト』に巻き込まれ行方不明になるが、二年前にティンダル基地にて重傷で発見された際の血液検査で生存が判明した。その後、基地内で作業員として働きつつも日本に帰れないか打診したものの、その特異な事情故にこの学園で

働く事となる。殆どの親族は既に死亡しており、両親も『ファーストコンタクト』時に死亡している。

とまあ上手く偽造されているが、多少調べればすぐにボロが出た。つまりこの男は何者なのかは全く分からない。

では彼の身元引受人はどうなのかというと、彼の不明瞭なものよりも遥かに正確かつ信頼のおけるものであり真実であることが伺えた。

故に解せない。何故その場しのぎのような経歴でありながらこの箇所のみ正確なのか。何らかの組織にしろここまで杜撰な書類を作るのは可笑しいし、かと言って全く彼が不審で無いかというと答えはノーだ。先程、すれ違った時の動きは重心のブレず、踵からでなく、殆ど摺り足に近い高さで地を踏んでいるから武術、それも東洋系古武術の心得があるのは歩き方から分かった。左腰が若干浮いていた事から判断して剣術だろう。

少なくとも、それは護身程度のものではない。体に所作一つ一つが直ぐに最適の行動へと移る事を目的としたものだ。恐らく、長きに渡って血の滲むような努力の研鑽によって得たものだろう。同じ剣士としての直感がそう告げていた。

そして恐らく、こちらの意志がどうであろうと一夏は彼に接触するだろう。当たり前だ、女性しかいないIS学園の数少ない男性職員、しかもそう年齢の変わらない人間がいると知れば誰であろうと興味を持つ。

怪しいが現在の判断材料では圧倒的に少なすぎ、どうしたらいいのか分からない。全く、厄介な存在が来たものだ。頭を悩ませるの

が弟の女性問題だけで済ませられないかもしれないと思うとまた頭が痛くなり、その場を離れた。

仕事を終わらせ、一息つくとい課の素振り^{ダイビングスーツ}と走り込み、それに水練（流石にこの寒い海の中を泳ぐ為に潜水服を着込んでいたが）を済ませ、こっそりと職員用宿舎の自分の部屋を見つけると開けっ放しにしておいた窓から入り、シャワーを浴びる。少し熱めに設定された水がまだ凍てつくまではいかないまでも冷たい海水にあった身に再び熱を取り戻させる。

今日は怠惰と不満に満ちた一日であったが、一つ興味を引いたものがあつたのを思い出す。通りすがりの黒のスーツの女。小柄な泰征よりも普通に高い長身にスーツの上からでも分かる鍛えられた体そして何よりも鋭い目に惹かれた。あれは強者の目だ。この世界で見た人間の中でも彼女ほど鍛えた武を持つ人間は今までにいなかった。恐らくアレと闘うとしたらどうなるだろうか。いや、愚問だ。命運尽きて何もかもが敵であろうとも、どんな敵であろうとも蹴散らし、抗い、戦って戦って闘って、勝つ。右腕が折れた？ 左手で刀を持ち、斬ればいい。手が無い？ なら足に刀を括り付けるまでの事。

相手になます切りにされようとも生き抜き、殺して勝ちを掴む。必要な事は情報と機会。その来たるべき日に、ISと戦える日に、彼方の世界で天下に双つと無き剣客となる日に向けて。

沸々と湧き上がる闘志は窓からの来客者により抑えられた。巨大な人ほどはある異形の黄金虫——来派と相州派の特長を持ちし名剣冑にして彼の剣冑、初代山城信國だ。

「信國、どうだった？」

《今の所、特に付け狙われてる訳でも不審な物もない。御堂の言う情報を司る部屋には入れなかったが、其れ程の機密はない筈なのだろう？》

信國の言には間違いはない。確かISは技術などは共有財産として情報開示が義務付けられている為、その気になれば大抵の基礎性能は調べられる。

しかし、解せない。確かに此処は此の世界では類を見ない重要拠点の一つであり、その防衛の必要性は言うまでも無いからこそ海上に作られているとの事であった。しかし、実際には違和感が拭えない。当たり前といえは当たり前だ、ISとは世界最強の個人兵装、そんな数十人の包囲程度ならば糸も簡単に抜け出せるだろうし何より此処の人材も未熟であろうが軍事に関わるだけあって格闘や射撃といった技術は身に付けている。そんな場所を侵攻するなど正気ならばしないだろう。

ならば、何故此の場に作ったのか？其れは即ち此の地に隠蔽したい、若しくはどの様な国であろうとも知られたくはないものがある。そう考えるのが妥当と考えたのだが……どうやら違うようだ。

「なら仕方無い。信國、今から型稽古をするから、誰かが来るか見ている場合は知らせろ」

《諒解した》

感情のない、しかしどこか苦笑するような気のする声を後ろから聞きつつ泰征は再び興奮を抑えれぬ体を引きずり夜の中へと消えて

いった。

紫煙を撒き散らしながら男は一息ついた。調べた結果はさほど良いものではなく、どうやらまたハズレくじを引かされたようだった事に思い切り舌打ちをした。調べた結果はさほど良いものではなく、どうやらまたハズレくじを引かされたようだった事に思い切り舌打ちをした。逃がした獲物は大きく、得たものは最低限のみ、もうこれ以上ないという程の完敗だった。

ポケットの衛星通信を手にとると連絡をする。しばらくの間の後回線が繋がったのか、受話器から女性的で男性的な機械のような声の応答が聞こえた。

『こちら、＜ミスリル＞作戦本部です。』

「＜スカウト＞、MAJ（メジャー、小佐）のシミズだ。G-1243。悪いが事は重大だ。急いでボーダー提督に繋いでくれ」

しばらくの間があった後、重々しい雰囲気を発するような男の声へと変わった。

『ボーダーだ。一体何があった？』

ゆっくりと唇を動かそうとしたが口が何時もの上手く動かず言葉にならない言葉を吐き出せなかった。

クソっ、中々に口が最悪の情報を流すのを怖れている。それは、あの日彼の存在を全てを消し飛ばした出来事故にか。

意を決したのか男は乱暴に、焦りを隠せずに語った。

「提督、アメリカのISの一機が、強奪されました。コードネーム『アラクネ』、第二世代機です」

これは驚異ともいえる。斜陽の雰囲気があるといえども腐っても鯛、超軍事大国であるアメリカから現行兵器最強にして一騎当千の軍馬を盗みあげたのだ。

一機で小国の戦力ならば軽く凌駕するそれがテロリストの手に渡る。想定される最悪の事態だ。しかも、ISは未だに『ミスリル』は得れていないのが現状。只でさえ行動するならば後手に回らねばならない身で更に戦力的にも利を取られれば作戦部隊は今まで以上に苦戦を強いられる。

「敵勢力及び、背後組織などの情報は掴めませんでした。これより更なる調査をしますが……」

ここまで遅れると、大して得られるものはない。言外にそう語る。

ボーダー提督もそれを読み取ったのだろう。何も言わずに通信を切った。

畜生、通信機を叩き付けたくなる気持ちを抑え、吸っていたつもの安煙草を靴で踏み消すと、男は新たな煙草をつけ暗い路地の中へと消えた。

第一章 四話（後書き）

ありがとうございました

ようやく原作キャラの登場

僅かですが

次は多分オーストラリアか一夏が登場かのどちらかになります
ではまたこの場で

第一章 五話（前書き）

また遅れてしまいました……

私の作品を待ってくれてるといふ唯一神のような懐の大きな方
ホントにすいませんしたッ！！！！

今回も酷いかもしれないけど許してくださいね〜！

第一章 五話

コレは……想像以上にキツイ……。織斑一夏は前後左右から来るような位に錯覚するほどの視線を浴び、背中に脂汗が流れたのを感じた。ついでに額から冷や汗が流れた気もする。

この状況はよりにもよって通勤通学で混み合う女性専用車に間違えてしまった時と似ている。痛いぐらいの視線と場違い感がどうしようもないのに、そこからは出られない。まさにその感じだった。違いがあるとすれば電車と違い、次の駅で違う列車や一つ前の車両に乗れるがこっちはそうはいかない事と視線に『え？ 何でいるのよ？』みたいな敵意に近い視線ではない事か。もつとも、天然の一级フラグ建築士で道を歩けば女性に惚れられるといわれる（by 五反田弾）彼でも流石にそんなヘマはしていないのでイメージに過ぎないが。

助けを求めようと視線を幼なじみである篠ノ之箒へと目をやるが、六年という年月は若い二人の間に深い溝となっているのか、見て見ぬふりなのかそのまま窓の方へとそっぽむかれる。最後の頼みの綱が断たれ、王手から本格的に詰みに入りかけてきた感覚に近いかもしれない、とどこか他人事のように考えられるのは余裕なのかな、そんな撤退を拒否された一夏は現実逃避を再開した。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

思考を現在とは遙か別の方へと向けて現実逃避をしていた一夏はそれなりに大きな声での名指しについ驚き、声が裏返った。僅かに

聞こえる笑い声に若干の羞恥を感じる。それを誤魔化すように声のする方向——即ちすぐ目の前の教壇へと目を向けた。

「あつ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメン、ゴメンね！ でも、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今織斑くんなんだよね。だ、だからね、ゴメンね？ あ、自己紹介してくれるかな？ ダメかな？」

副担任の山田真耶がどこか頼りなさげに何度も頭を下げながら尋ねる。教師というのが初めてで慣れないのか、彼のような若い男性に免疫がないのか、それともその両方か。どうであるにせよ、彼女の謝罪は何だかこちらが年下を虐めたような感じがして何だかいたたまれない気持ちになる。

「いや、その、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、落ち着いて下さい」

「ほ、本当に？ 本当ですか？ 本当ですね！？ 約束ですよ。絶対ですよ！」

何故か一夏が普通に返答しただけなのに、顔を上げヒートアップして詰め寄る真耶と反応に困る一夏に更なる視線が集まり、一夏は溜め息をつきたくなったが、言い出した事にはやらねばならぬし下手に一度目の印象を悪くすると、この環境に間違いなく馴染めなくなるだろう。三年間否が応でもいなければならぬのだ。気を引き締める。

意を決して席を立つと後ろを振り向く。とにかく、もはや物質と言っても過言ではない視線には興味という一つの感情で満ち満ちている。世界初の男性IS操縦者という世界中の男分の一のレアスキ

ルのせいだろうが、つい先日までそんな事も知らず、平々凡々な生活のありふれたどこにでもいる男子学生として過ごしていたのだから特に期待を添える事なんてある訳がない。手に記された文字の力でどんな武器でも使えるだの何かの拍子で身体能力などが向上したりする訳でもないただの一般人だ。だからどうやって乗り切るかシミュレーションしたりもないし、こんな時の対応の仕方なんて分かる訳がない。

緊張して生唾を飲み込む。喉がカラカラに乾いてきた。軽く咳払いをしようにも乾き過ぎたのか何も出来なかった。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

まず無難に切り出したが何を言っているのか分からず、そのまま続けるのも難しいからか脳は最低限の会議の末に話を切るような言葉を発するよるに口に命じた。しかし勿論の事、彼の目の前にいるクラスメイト達は納得いかないようで他にないのかとせがむような視線が加わる。

何を話せばいいのか？ 趣味か、それとも別のことか？ 一瞬走馬灯のようにここまで来た経緯が頭をよぎり、現実に帰還し腹をくる。覚悟は決めた、よしっ！

「以上です」

視界から数人が思わずっこけ消えるのが見えた。

心なしか、いや確実に先程よりも泣きそうな表情をした顔を歪ませている。助け舟に筭を見たが、素知らぬ顔でそっぽを向かれた。退路も進路も誤った彼に下されたのは裁きの鉄槌だった。

村上泰征は意気揚々と足を一年一組の方へと向けていた。理由は至って簡単、ここ最近気になっていた人物——織斑千冬に合間見える機会を得たのだ。といった所で職員会議で偶然あった忘れ物を見つけたので届けるだけだが。しかし先程の会合の際は顔合わせ程度で早々と去ったのだが、今度は違う。やはり対面となれば斬り合いを、死合を所望するしたい欲望に駆られるが、それは抑えねばならない。

どんな世界のどんな国であれど理由はどうであれ殺人は法の下では禁忌である。勿論、法の適応外や超例外的なものもあるが基本はそうだ。

人の世に生きるには誰かが誰かに支えられる事だ。如何なる剣豪であろうともその腕では刀一振りすら作れず、米一粒も生み出せない。つまり、共存しなければ生きていくことすらままならないという事だ。その中で人を殺すという事は即ちその集団において疑心暗鬼が生じ、各々がその手に武器を持ち緊張状態になり誰かに殺される前に殺す、これのみが頭を占め最悪その集団は壊滅する可能性もある。

その集団を守る為の秩序であり法だ。

しかし、大和ならいざ知らず此方はかなり情報伝達に長けており、しかも彼の持っている劔冑の存在も知られている。もし、何かしらの行動に出るならばそれ相応の覚悟がなければいけないだろう。

事を起こすならば彼方に帰る目処が立った時に起こせばよい。少なくとも、今からこの世界に敵対する必要は無かろう。そう判断し

ただ。

顔を売るだけでもそれで良し、出来るなら流派について聞き、手合わせを乞う程度でよいだろう。

其処まで己を律する事に努めながら歩いていたら、もう着いてしまったのに気がつき我が身の未熟さに思わず失笑すると扉を開いた。

「失礼。織斑教諭、忘れ物です」

一夏は実姉、千冬との遭遇と愛の鞭にかなり驚かされ、また痛めつけられたもののそれ以外は特に……いや、幾分か興奮は冷めてはいるものの間近の『ブリュンヒルデ』と一夏に興奮気味にその目を輝かせていたが、それも例年と比べてもそう大きく変わるものではなく至って滞りなく自己紹介は終わる、その様に思えたがいきなり開かれたドアから小柄な影が入った来た。

今座っている学生らとそう変わらない背丈に職員の着用する作業着はどこかアンバランスで、目元深くまで帽子を被っている目鼻立ちにはよく分からないが、声はまだ若い少年のようだ。しかし、何処か固いその雰囲気とは裏腹に体は緩い。千冬はそれに何か警戒した、まるで獲物を狩る前の蛇のようだ。今まで持っていた疑念が頭から湧き上がる。一夏を生徒を守らなければならない、それを考慮するとどんな暴挙に出るのか分からない相手に緊張が走る。

「……お疲れ様です。わざわざよろしかったんですか、村上さん」

千冬は周りに悟られないように殺意を込める。しかし、それも何処吹く風といった様子で彼——村上泰征は僅かに笑みを浮かべる。

「いえ、今日の自分には大して仕事はありません故。それに年下の自分に敬語なんて不要です」

穏やかながらもやはり固い感じの拭えない調子でそう述べる彼の表情は彼女の思い浮かべたものとは違う陰惨な雰囲気、欠片もない真面目な礼儀正しい青年のものだ。気のせいなのか……？ 一瞬彼女をそう思わせてしまう程だった。

「いえ、職務中ですし幾ら同じ職員でもそうあっては生徒に示しがつかない」

「そうでしたね、失礼致しました。っと、失礼。申し遅れました。自分はアリーナ整備を担っております、村上泰征と申します。年の頃は十八で諸事情により此方のＩＳ学園に御世話になっております。未熟な若輩者故至らぬ所がありますがどうか宜しく御願致します」

思い出したかのように、生徒に向かって深く被っていた帽子を外して深く礼をする。微笑んだその顔は優男といった感じの顔立ちではあるが、何ともいえない独特ななにかがあった。陰鬱にしては明るすぎ、達観にしては希望がある。しかしかといって陽気にしては陰があり、老人のような諦観すら時折含まれて見えた。

しかし、十代の乙女たちにはそれが返って憂いを帯びているように見えたのか、それともミステリアスに感じられたのか一夏ほどではないが歓声を送られた。一夏のような学生ではなく職員、しかも裏方の単純労働的なイメージの拭えないアリーナ整備となれば近年の弱い男とすればまだよく見られた方だろう。

しかし、一夏には違った。言うならば彼はこのキツすぎる学園生活で一種の救いになるかもしれないのだ。学生でないにしろ、話し相手なり男同士だからこそ心を許して話せたりする事だってある。

「あ、あの！ 村上さん、暇ですか？ 暇なら昔の話なんかでもしながら昼飯どうですか！」

一瞬泰征は目を見開いたが、一夏の後ろを見ると少し困ったような顔をした。

「馬鹿者、授業中に教師の前で雑談をしようとするな」

頭から小気味のいい音を響かせ、一夏は沈黙した。今日四度目の小さな破裂音は前回に引き続き蓄積されたダメージに加えられ言葉では言い表せない状態が現在の一夏の頭だ。

「まあ、常が遅い方ですからなるべく合わせるようにしますが、期待はしない方がいいですよ？」

では、失礼しました。と述べる何事もなかったかのように泰征は消えていった。その嵐のように現れ去っていった彼にクラスは何となく変な、言うなれば白けたような空気に包まれたが、一夏は学校に年が近い男性がいることに少し安堵した。

泰征が部屋を出ると逃げるように部屋へ走り帰った。まだ授業途中であり、誰とも会わずにいて幸いだった。今は何よりも視線が怖かったから。一瞬でも人へと戻るのが怖かったのだ。誰かに見られたら、そのまま縋りついてしまいそうで。

彼にも無論感情はあるが違う、そうではない。何も、ないのだ。今まで感情のように見えたそれは昔あったものをとりあえず無造作に取り出したような、ただなぞっただけのものであって実際の彼に

はそんなものはないのだ、まるで死人のように。

彼は剣を極める為にそれを捨てた。剣術とはただ剣を振るうだけではない。必要ならば口を用いて敵を欺く事で条件を此方の有利に導き、地形や敵を調べ相手の不利を突かねばならない。感情一つ取っても欺く為、敵の集中を妨げる為の材料として使える故に、己を欺く技量がいるのだ。そして、その為には死を臨む覚悟も己の人としての生きる資格も捨てねばならない。

故にその目的が為に不要なものは捨てる……筈であった。しかしまだ捨て切れてないのは、未だに人でありたいと心の何処かで思っているのは己ですら分かる。偶々それが一夏の真っ直ぐな瞳に当てられ、つい別にどうでも良からう事柄にまで関わらねばならなくなってしまった。ただ剣にあれば剣鬼として生きれば良からうに、未だ未練がましくも僅かに無意識で残している感情に腹立たしさすら覚える。

「兄上、遙……」

半死人はその未練の正体を口にするとそれにしがみつくと弱さと捨てきれない弱さを嘲う。

誓いはその為にあるのだ。己はあの日に既に死んでいる。故にただ剣を振るうが為に生きるのだ。剣こそ、おれの剣こそ何よりも彼等を——彼等との縁を感じれるのだから。その決意を新たに胸にし彼は笑った。何か擦り切れたような、何か遠い美しい過去を懐かしみ偲ぶような、何か壊れたような笑みを浮かべながら、ただ独りの部屋で笑い続けた。

第一章 五話（後書き）

ミッション終了

お疲れ様でした

次のミッションに向け、レポートの提出をお願いします

第一章 六話（前書き）

戦闘機って皆さん好きですか？

第一章 六話

風を切り遠く、速く、空すらも置いてゆきそのまま飛べるその機体のスペック通りの異常なまでの加速に彼女はただ驚くしかなかった。これでも一応エースとして活躍した彼女が必死になってまで操縦桿を握らねばならず、常に機器に目をやり続けなければいけない程だ。それでも、このジャジャ馬はまだまだ本気を出してはいない。違う、彼女が出し切れてないのだ。化け物じみた性能に笑うしかない一方で、口には違う意味の含んだ笑みを浮かべる。

そう、なら面白いわね。彼女は認めた。己の力不足を、この機体の底知れぬ能力を、真に彼の語る『最強の翼』の意味を改めねばならない事を。そして、決めた。この『翼』の力を限界まで引き出す事、それは確かに彼女の任務だ。しかし、これは彼女の望みでもある『誰よりも遠く、速く、高く飛ぶ』、これを最も叶えられるそんな確信が何故かあった。

機体速度を更に上昇させる。恐らく急な旋回をするだけで骨にひびが入りかねない凶暴なまでに強くなるGを無視して進む。しかし、彼女の顔に浮かぶのは笑み。痛みすらも楽しんでいる狂信者のような、それでいて遊びに熱中している子供のような無邪気な笑み。

しかし、それも仕方がないのかもしれない。今機体が出している速度は最早、今までの機体ならばとうにブラックアウトするか、内臓が破裂して操縦すら出来ない状況になっていただろうに、多少慣れている程度のそれを保ったまま飛んでいるのだ。

PIC、パッシブ・イナーシャル・キャンセラーの部分的な使用により人体へのGを軽減する。まだISのように完全に影響のない

ようにするのは現段階では不可能だが、いつかは過去から悩まされてきた人体への影響の一つの壁がなくなってしまうかもしれない。

加速する。許される限り速く、速く、速く！！風を音を全てを置いてゆく速さに翼は歓喜の唄を上げる。

それは産声。『彼女』が真の意味で生まれた瞬間を表していた。

そして、そのまま速度を上げ続けブラックアウト寸前で機体を減速させながら、自動操縦へと切り替える。

機体の制御の方にP I Cを回したのか、急に強いGがかかり一瞬戻しそうになったが、飛行機乗りのプライドで何とか耐えると、基地が見えてきた。

物のついでだ、このジャジャ馬に最後を任してみよう、そんな茶目っ気が彼女の頭に浮かんた。オートランディング・システムを作動。A L S誘導に従ってランディングギアが下ろされ、アプローチ。ギアードアウン、ロック。

ファイナルアプローチ、接地。自動ブレーキ。スピードブレーキの音がヘルメットの中にさざ波のような穏やかな緩さすら感じた。楽しい夢から覚めてしまう残念が若干顔に出ながらもつい思ってしまう。まだ、もっと飛べればいいのに。

しかし、夢はいずれかは覚めるもの。彼女の相棒は語ることはないその身で語っていた。下手したら自分より上手いのではないか、と思える程に安定した着地を見せながら彼女『達』は帰投した。

レイは貴重な実験機のデータを喪失しかねない行為であったとして、こっそりしぼられた後格納庫の方へと足を向けた。『彼女』の

待つ場所へと向かう為に。

<YF12513>——電子偵察型特殊実験第3番機、それがレイに与えられた翼の公式名称だ。最初、この名称の通り3機あるのかと思ったがそうではなく、既に『AIM計画』で実働した電子偵察型の機体から数えた数らしい。

AIM（対IS用全領域戦闘兵器）計画。かつて超軍事大国であったアメリカが対IS戦闘に対しての絶対的優位のない状況を打開し、過去の覇権と世界の警官たる誇りの復活の為に計画だ。具体的にはISに匹敵する量産及びパイロットを選ばない汎用性に富んだ機体か戦法の制作であった。しかし、この計画は戦法においてISに勝つことは不可能であるとして今ではASの最新鋭の第三代機、M9『ガーンズバック』のIS技術を組み込んだものや彼女が乗る機体——パーソナルネーム、『雪風』のように元々がIS以上の性能の部分を引き上げる事で勝つという意外とムチャと無謀だらけの計画だった。噂では戦車を変形させて重量型ASにするやら戦車にレールガンをくつつけるやら特殊なエネルギーを使用したスーパースーパー兵器やら古いタイプのミリタリーマニアやSFマニアにこよなく愛されそうな夢と浪漫に溢れる物も作ろうとしたそう。その大半は失敗してしまったそうだが。

この格納庫にはそういった失敗の中から生み出された機体が彼女の駆る雪風を含めた数機が陳列している。M9は勿論の事、『圧倒的火力による殲滅』を目的にした重量型の物や『精神に影響を及ぼし戦闘不能にさせる』兵装を搭載したM6『ブッシュネル』、開発途中の『YF122』を改良し試作ECSとTLS（戦略レーザ兵器）、それに散弾式の小型ミサイルを搭載し、『火力と隠密性を活かした超長距離からの狙撃と空中戦を展開する』ためのYF124、そして『マッハを超える圧倒的な機動力でISを引き離し、特

殊AIによる電子戦により迎撃する』をコンセプトに作り上げられた雪風。どれもこれもコミックやテレビ、サイエンスフィクションの中だけであって不思議ではないだけあってか非常にデリケートかつピーキーな機体ばかりだ。

何せ格納庫の機体は実験機であり、まだ生産ラインなど組まれる予定がない機体が殆どだ。例外のM9ですら未だ様々な改良点が多く、部品の仕様が二転三転するのも珍しくないそうだ。そんな親にずっと欲しかった玩具をクリスマスプレゼントで貰ったような笑みで雪風を眺めていると、世界全てが敵であるかのように辺りを睨み続ける長身で細身の男が来た。彼女も覚えのある顔であり、ある程度馴染みとなった顔だ。

「おい、ふけりに来たんならヨソへ行ってくんねーか、嬢ちゃん。こっちはメンテに時間かかるんだよ」

いつもと変わらず愛想がない『おやっさん』だが、いつも以上に不満そうな物言いに少し疑問を持った。彼の名は確かジェイコブズ・バーガンディーだったと記憶しているが、整備班の人間も大抵が彼をおやっさんと呼ぶ為、それに倣って彼女も愛称で彼を呼んでいた。その確かに無愛想だが、今まで機体を眺める事には特に何か言ってくることはなかった。

「え？ どうしたのよ、班長。いつも、そんな事言わな」

「試作式のラムジェット組み込むんだとよ。ったく、お偉方ってのはいっつも無茶苦茶ばかり下に押し付けやがる。こちらら、F1のピッチじゃねえんだぞ。機体とエンジンの微調整やらMF5の書き換えやらこれ以上仕事増やすんじゃないやねえつつんだ！」

メイン・フライトコンピューター・システム

こちらの言葉を切り、半ば怒りが籠もった言葉に今夜、彼は徹夜

確実である事を悟った。

大抵彼が不満なのはそれが理由なのは短い付き合いで分かった事だ。

素直に頷き、その場を去ろうとする。このまま自分とは無関係な事柄についてでキレられ八つ当たりされてはたまったものではない。どんな理由をつけて逃げ出そうか、下手に逃げの言葉で藪蛇に突っ込む愚をしないように思案していると、後ろから背中を叩かれる。自分より少し年上くらいの生真面目そうな女性だった。確か雪風を含めたA Iの調整を担当していた筈だ。

「ファウラー小尉、直ちにキルマー大尉の部屋に来るようにとの事です」

キルマー大尉は出向した軍人の統括の仕事に関わる職務を担う男だ。レイとは二倍ほどは年を取っているが、やたらと冷徹とも言える程に落ち着いていることから陰ではアイスマンと呼ばれていた。

次の実験についてでも決まったのだろう、どうあれこの場から逃げれるのならば好都合だ。

「分かりました、すぐに向かいます。じゃ、班長仕事頑張ってよね」

おうよ、と大人の風格を醸し出しつつ後ろ手を振りながら部下に叱責混じりの指示を出しつつ現場へと戻っていった。

縁が金で眼鏡に金より少し銀に近いオールバックに映えて見え、哲学者や科学者のようなどこか他人を寄せ付けない雰囲気は彼の容

姿と相まってよく似合っていた。整然とされた書類の山に机に余分な物が見えない辺りかなりの几帳面かつ細かい事が伺え、彼の服装を見なければ外交官や官僚と間違えてもそう不思議ではない。

しかし、レイは彼――がかなり優秀な軍人である事もよく知っていた。元トップガンとしてに数々の功績を上げたエリート中のエリート、西側の戦闘機乗りなら知らぬ者はいない空の英雄だ。

そんな彼もISの登場から必要が無いと言わんばかりに僻地に飛ばされ、今はこの機体のデータを本国に送り、パイロットを含めた人事の総括となればかなりの負担であろうにそれを歯牙にもかけないようなタフな精神にはやはり、驚きを禁じえない。

「要件は为什么呢？」

「次のフライトの調整の件なのだが、先程まで格納庫にいたのなら分かるだろうが一週間以内にラムジェットの始動試験が済み次第、高高度での試験運用を行う。これには模擬戦も含まれる事になっている。詳しい試験内容については後日になるだろうが、先にラムジェット運用下での機体スペックをまとめて貰ったからそれを見てくれ、以上だ」

いつものように必要最低限かつ形容詞の少ないまるで機械を感じさせる言葉で述べると、その手にあるスペックカタログをレイに手渡すとレイはそのまま敬礼して部屋を出た。

尊敬に値する人間ではあるが、彼の事がどうも苦手なのだ。どうも漠然と何となしに苦手意識を持っているというのは確かに悪いと思うのだが、無意識なのではないのかもしれない。

とりあえず、いつになるかは分からないものの自分の命を預ける物について知らない訳にはいけないので、まず少しペラペラとページを捲りながら覗く。通常時の推力は約9トンと今までに乗った機体と大差はないが、マッハ2を超えた状態での長距離のスーパークルーズも可能。理論限界だと上空20000m、マッハ2を超えるという条件下であればセミ・ラムエア・ジェットへと任意で切り替えられ、その時にはなんと通常時の推力の約2,5倍となりその速度はマッハ3,2というMIG-25並みの高速でしかも機動性に関しても現在のままを保てるという化け物だ。

流石にマッハ3下での戦闘機動となるとPICを積んでもなお無人機でないと難しいものらしい(コンピュータの計算だとまず肋骨が砕けて内臓に深く刺さり死に、次に頸椎が複雑骨折して痛みも感じる間もなく死ぬと出たらしい)が、そもそもそんな速度を出しかつ戦闘する相手などいないため大した問題ですらない。

計画の通り、ISに勝る性能に特化した機体であるが少し彼女の中に小さな疑問が浮かぶ。それはこの異常な程に切り詰めるスケジュールだ。確かに彼女は飛ぶのは好きであるし、いつまでも空にいられる事こそが彼女にとっての幸せだ。だがかといって今まで数週間過ぎてきて、この調子に変化してきているのは分かっているつもりだ。何か、ピリピリとした空気を感ずる。それは決して気のせいではない。

まさかISが盗まれた訳でもなかるうに、そんな躍起になって対ISの量産兵器を作る必要はないだろう。既にソビエト連邦が世界中の脅威として君臨していた時代は終わっている。今更、第三次世界大戦を起こせるのはアメリカ唯一国のみだ。

何か嫌な方向に流れそうな気がしてきた。少なくともこっちにはいらぬからね、もう苦しむだけ苦しい思いはしてきたんだし。ど

こか自分にそう言い聞かせると自分の今使っている部屋の前に着いた事を知るとシャワーを浴びる。

体温より少し熱い程度の温めの水が体を包み込む。

磁器のようなきめ細かい白の素肌に雫が流れ落ちる前にタオルで荒々しく拭き、燃えるような赤い髪を若干鬱陶しそうに一つに纏めるとまだ半乾きの状態であるのも関わらずそのままベットにしがみつくように倒れ込んだ。

眠りにつく前の瞼が重くなってきた中で、ふとPMCの連中の言っていた事を思い出した。早いAS乗りの中で噂される謎の部隊の話を。曰く、今の世界の十年は先を行く技術力である。曰く、世界のカウンターテロに対処する正義の味方気取りの連中である。ならば、彼等ならIS相手でも圧倒的に不利なASで、戦闘機で戦えるのだろうか？ 分からない、分からないが少なくともレイには空恐ろしかった。

人の直感も大事だが何より戦いには機体自体の高いポテンシャルが大きく働く。いくらいいい乗り手でも複葉機で超音速ジェット機に敵う筈はない。それ位の差があるのだ。

確かにアマチュアの長距離ランナーが世界大会レベルのスプリンターと短距離を競うようなもので戦う。その敗者はただ空から翼をものがれ墜ちるか、その心臓を勝者に捧げられるだけ。

もうISは白騎士から格段と進化した。仮想敵である第二世代はどの機も未だギリギリ勝てるかどうかのレベルで開発中の第三世代となれば逃げに徹した方が遥かにいい代物だ。

もし、仮にテロ組織にISが盗まれて、そしてこの基地が襲撃さ

れた時に、私は戦えるのか？ 戦える、そうではなくてはならない筈なのにそれをどこかで拒否している。人を殺すのを躊躇している？ 圧倒的な差を感じるから？ 分からない、自分の事であるのに全く分からない。それが怖かった。でも……、黙ってトリガーを引かねばならない、それが命令ならばレイが軍人で、戦士である限りはそうでなくてはならないのだ。

そう、そうなんだと意志を固めた途端にブレーカーが落ちたかのようにレイは眠った。まるで、それ以上深く考えるのを恐れたかのように深い眠りについた。

下着姿ですらなく、しかも電気も付けっぱなしという無精な状態であったのに気付くのはこの翌日の事である。

第一章 六話（後書き）

どうも無茶苦茶なスペックですがISやブラックテクノロジーで様々な進歩があるのだと思って下さい

そういや大体順調に次の次位が書き終わればフルメタ外伝の発売買わなくては

と、グダグダとしましたがとうございます

感想、批判、それに改良点や誤字脱字の修正の知らせ何でも承ります

第一章 七話（前書き）

遅いっすよね…

いや、流石に終戦前後に戦争とかのネタが出るのは避けようかと

すいません、嘘つきました
単純に書けなかったんです

第一章 七話

足取りが重い。理由は分かっている。己の未熟が生んだ約束を果たさねばならないからだ。必要もない事をせねばならず、下手に話すとボロが出る可能性だろう事を考慮すると最悪の一手を生み出してしまった。

『敵』を作らない生き方も剣客には必要な要素とて言えども、わざわざ衆人環視の中に踊り出る必要はまるでない。そもそも、動き一挙動一投足でその剣の流派まで分かる達人もいる。即応性を第一にする彼にとって体に染み込ませた剣の動きは最早無意識になるまで染み込んでおり、それを誤魔化すのは至難の技だ。

しかし、此処で出ないとなれば只でさえ少ない男性との交流の機会が断たれてしまう。殆ど旧世紀の遺物とすら言える男女平等、もしくは男性社会だった豪州と彼方の世界でも勉学と剣を学ぶのに懸命であったが故に女性に免疫がまるでない生活を送っていた泰征にはこれは死活問題だ。即ち職員、学生を含めても男女比で表すのに小数点が必要な此の場合は彼にとっては非常に居辛い場所である。

いくら世界唯一のIS教育期間といえどISの総数自体が少ないことから大して人数が集まらないだろうとタカを括っていたが、それが外れた。つまり、否が応でも彼の者との約束は守らねば己が身の危険に繋がるのは火を見るより明らかだ。

時折、視線が豪州や道場で感じた嘗め回すような物を感じてきている辺りかなり不味い。生憎彼は同性に言い寄られて良い気持ちにはなれないが、かといって色恋沙汰などどうだってよい。剣に生きる、それに無意味なものに現を抜かす程暇ではない。

しかし、やたら構ってきた姉と呼ばせるのを強要するあの女性の対処の仕方、妹の怒りを宥めかす方法も分からなかった若輩者にどういったことが出来るものか。恐らく何も出来はしまいだろう。いや、もしかしたら妙案をあつめた男は知っているやもしれない。何せ、あの中にいながら全く動じた様子を見せないなど見た目より遙かにそういった場を経験しているに違いない。

僅かな希望とこれからの己が身を置く壮絶な戦場へ向かう決意を固めると食堂へと足を進めた。それが彼の想像を遙かに越える事になるなど、この時の彼はそんな事など思ってもいなかった。

一夏は今、燃え尽きていた。少なくとも、今日半日の様々な出来事は確実にどれもこれもが疲労困憊になるのに重要なファクターとなりそうだと思えるくらいには燃え尽きている。

基礎教育を含めた履修の必要性の為、朝からずっとISの基礎理論を学習している筈なのだが全く頭に入っていない。そのため、今日脳細胞が三万個の事故死を果たした時に入学前の参考書を古い電話帳と間違えて捨てたのを死ぬ気で後悔せねばならなかった。

一週間であんなの覚えれっかよ、と口に出来るものなら口にしたいが口にした時の最悪のシナリオが頭に浮かび上がったので心の中のみにした。人間、生きてるって素晴らしい。

それと久々に会った幼なじみがやたらとつつけんどんな上に謎な言動をするやら、イギリスの代表候補生が絡んで来て鬱陶しくてしようがないやら、クラス代表をその代表候補生とその座を争わなきゃいけないやらでいっぱいだよ。

それだけでも充分なのにクラスからの一種の暴力な眼差しに互いが互いを牽制しあうプレッシャーもモロに感じるし、授業の中休みには絶えず他クラスのみならず二年、三年のお優しい先輩、同学年の方々の暖かいを超え、全身火傷というより炭化しそうな眼差しを頂き、胃に穴が開くならこんな感じかな、と涙が出そうになったのは秘密だ。

世界で活躍する中国友好の証――パンダの公開初日のような感じだ。因みにジャイアントパンダは竹だけじゃなくて他の熊科と同様に魚や肉も食べれる雑食だったりする。奴らが笹しか食べないのはデマなので注意するように。

つとそう言えば鈴の奴は今元気にしているのだろうか？ などと考えている内に授業終わりを知らせるチャイムが鳴った。

今までの人生で最も酷く疲れる半日を過ごした訳だが、少なくとも昼食では気を紛らわせるだろう。何せこの学園では希少な男性職員、しかもまだ若いらしいから悩みやら同じような苦勞を持っているに違いない。

ならば互いに気苦勞を話せる位になればいい。何よりこれから学校生活のために。ひいては男女比率が考えるのも面倒なこの学園で生き残る為にも、逃げ場を作る感じの意味で。そんな事を考えながら一夏は食堂に向かう事にした。後ろから見られてるのは気付いていたが、午前の中で感覚が大いに狂ったせいかなりの数の女子がおり、さながら白い巨塔の財前五郎のようになっていたのに気付くのはこの十分後、泰征が一夏の後ろを見て若干引いた時のことだった。

可笑しい、泰征は思った。おかしい、一夏もまたそう思った。飯

の味がしないのだ。綺麗に盛られた白米に泰征は好みの吸い物を一夏は味噌汁を、おかずには鯖の味噌煮。漬け物は程良い食感と塩味で口の中で小気味良い音で噛み砕かれ、喉をゆっくりと通っている。一夏は居心地の悪さと口直しに茶を口にするが、やや温めの水を飲んでるようにしか思えなかった。

気まずい。互いが互いにそう思っているのだが、もう開き直る以外の道はなかった。IS学園唯一の男子生徒と謎多き同じく若い職員。それが目立たぬ訳が無く、視線は先程より格段と増えているのを一夏は認識している。

「そ、そういえば俺、ちょっと気になっていたんですけど！ どうして泰征さんはIS学園の職員になったんです？」 余りの視線に耐えかねて、少しでも気分をそらしたかった一夏は先程から思っていた事を直球で聞いてみる事にした。確かに、そう歳が変わらない十八の人間が職員を、それも機密などが多いIS学園で男が働くとなれば気にならない訳がない。それは周りの女子も同様だったらしくさつきよりも少し近くに來たような気がした。

それに何でもないかのように泰征は応えた。

「豪州、オーストラリアです。その時の経験から此方では一応はこの警備のAS操縦士なんです、そんなものを使う必要性がないからASを使ってアーリーナの整備をしています」

実際は多分PパワーSスレイブを使った方が断然と操縦しやすいんですが、コスト的にちよっとするんでしょうね、と軽く言う泰征の言に少なからず一夏は動揺した。

オーストラリア、現在『紛争地域』だ。白騎士事件がまだ世界の

混乱の渦中にあった頃、突如として出現した未確認飛行戦団からオーストラリア・シドニー（今残っている最古の戦闘記録で目撃例は壊滅したニュージールランドから逃げ延びた難民より確認されている）が奇襲を受けた事を端として、アフリカや南アメリカに襲来。その際に通信が誤作動を起こし、回線が混線した事から以後この未確認知的生命体を『ジャム』と呼称するようになった。しかし、意外にも最初期は数に押されつつもあっさり迎撃に成功するがその数のみならず戦術を駆使し一国の戦力では苦戦を強いられる事になった。そこで白羽の矢が立ったのが次世代兵器ISによって足場が危うくなっていた余剰軍人である。彼等を一齐に退役させるとなると、治安問題や就職問題などが悪化の一步になりかねずその対処に各国は頭を抱えていたが、成る程『退役』ではなく新たに国連軍として『再編成』となれば雇用に関しては問題なく彼らの、男たちの誇りにも傷一つ付ける事無く大手を振って国の機関からは外せる訳だ。

国連の資金を一部嵩ましせねばならぬだろうが、この先十年では無くならないであろう社会混乱を考えればまだ安いものだった。もしジャムの襲撃が無かったならば、アメリカを支える旧来からの軍需産業はその幅を大きく縮小もしくは消滅し、それによる退職者やアメリカの支えたる産業の低下は世界に多大なる影響が出た上、その上で更に軍人の首切りとなるのだから、社会情勢は世界恐慌以来最大の景気の低下を伴い大混乱になるであろうとすら言われていたのだから、それが解消されるのならどの国も特に不満はなかった。特に発展途上国が多い南半球はそれどころの状況ではなかったのもその理由の一つかもしれない。

そしてISコアの譲渡、これは各国、強いて言うならば先進国の思惑が叶う形となった。その時の現状ではIS開発に南半球の各国は参戦出来ないのは確実だった。国の防衛こそが最大の最優先事項でありその上で各国は先進国に頭を下げて見返りに建国以来最大の

収入を得れた国もあるのだからそれをはねのけた場合を想像したくはない。国の防衛こそが最大の最優先事項でありその上で各国は先進国に頭を下げて見返りに建国以来最大の収入を得れた国もあるのだからそれをはねのけた場合を想像したくはない。とにかく、未確認知的生命体による侵略に対する特殊国連軍派遣法案は可決され、毎日の迎撃と進撃は膠着状態で各国では部品の生産が追い付いていないという程の激戦地帯。

そんな一夏には想像もつかない所から来たらしい泰征の顔をジロジロと見る。別にそうおかしくはない、童顔で一夏よりも小柄な体格の泰征が一夏より年上だろうに全くそうは見えず、むしろ中学生と言われて納得したり、きっと作業服よりも学生服を着ていた方が似合いそうな感じの泰征が戦場帰りとも思えない。

こう、なんて言うか刺々しい感じとか筈みたい研ぎ澄まされた刃みたいな感じが感じられない。むしろ空虚などこか世捨て人のような、世界から隔絶された仙人のようなそんな感じが近い。「別に居たと言えども、実戦は基地に近付き過ぎた敵機から防衛する為に地上から援護射撃をしただけです。後は訓練程度でそこら辺の傭兵の方がまだマトモな戦歴を持っているのでしょうが、この国出身だったおかげでおぼれの形で仕事が入ったんですよ。ですが、着いてすぐに日本は始業式だから仕事らしい仕事もなくてしかも船にいる間に男性の操縦者がいるなんて発表があったんで、聞いてなかった情報だったからビックリしましたよ」

こちらが考えている事が分かってるのか、何の事も無げに言う。しかしサラリと言ったが、つまりは泰征は少なくとも己の命を死ぬかもしれない最前線で晒した事があるという事だ。

しかし、喜怒哀楽も憎しみも恐怖も籠もっている訳でもなく、ま

るで昨日の夕飯の内容でも話すかのように当たり前に、レポートをただ読んでいるように淡々と語る。そこには何もない、そう何もなかった。それは一夏から見れば、いや普通ならば異常であった。

一夏にはその歪みが不快であった。一夏が泰征と知り合ってまだ僅かな時間しか経っていないが、それでも彼が少なくとも悪い人間ではないのは分かっていった。取っ付きにくい感じはするが、着いた時も視線の来にくい窓際の端の席を先に取っていたり（もっとも意味はなかったが）、あまり話し掛けては来ないがちゃんと質問には返すし、きちんと落ち着いた感じで話を聞いてくれた。そへに一年下の一夏に対しても丁寧な喋るなど意外に細かい配慮を見せていた。元々泰征が人を気遣える優しさと穏やかさを持つから出来る事だと一夏は思う。だからこそ、彼がこんな死人のように機械のように無感動で生死を語るようであってはいけない、そう思った。

もっと力があれば家族仲間を、いやもっと大きなものも守れるかもしれない。世界を守る英雄になりたい訳じゃない。でも、こんな哀しさを繰り返させては間違ってるのは弱い一夏ですら分かる。

「……強くなりたいな」　IS学園に来てから初めて強く思う願い。ただ周囲に流され入学し、何をすればいいのかも分からなかった一夏が見つけた彼のしたいこと。

ボソリと呟く一夏の声に気付いた泰征が何か言ったか問うたが、一夏は誤魔化すと最近の世間の話題や友人達の話をし、またそれに応えるように泰征も養父やその教え子達との付き合いをポツリポツリと語った。なら、まずはこの人を初めに助けられるようにしなきゃな。一夏はそう思いながら自らの目的への一步を確実に踏みしめていた。

泰征はチャイムに慌てて消えていく一夏や生徒らを見送るとISに関する資料を見る為に資料室へと向かった。一夏からISに関する様々な知識を得たかったが彼は生憎にもそういった情報は知らないらしい。

新入生の殆どがISの操縦経験は無いのだから当たり前であり、それに一夏は話を聞く限りだとここに他とは違い望んで来た訳ではなく様々な国からの勧誘などを絶つ為もあったようだから半ば嫌々来たようだから仕方ないだろう。もっとも今は流石に周囲に遅れをとっていることを自覚して励んでいるそうだが。

意識を前に戻す。機体スペックを表示。まず見るのは日本製第二世代型量産機、打鉄だ。これにしようと思ったのは大して大きな意味はなかったが、強いて言うならば機体が近接格闘を目的としているのか初期装備に太刀があったからである。遠距離からの銃弾ならばその気になれば太刀で切り払ったり出来るものの、此方には既に熱量兵器がある。そんなものを切ろうとした所で刀が溶けて終わる。避け続け、懐へ入り斬ればいいがそれではつまらない。

なら既に初期装備に近接格闘兵器のある機体が様々な武器を搭載したと仮定すればよい。過去にあった訓練や試合などの機動や戦闘方法、更にはスペックから見れる弱点。これらを統括して見れば、戦うとなっても想定外というのはそうあるまい。

ISは全てのスペックデータの提出が義務付けられているのだから、各国がそういった場で失策がばれるとやれ技術の提供の要求や国際世論で一気に不利に立たされるのだからたまったものではない。

つまり、見つかってもさほど問題にならないもの以外は書いてあ

る内容は正しいと判断すべきだろう。

となれば、おれは大きな勘違いをしたのか、そう思わざるを得ないだろう。音の壁、劔胄の前にすらあったその壁を超える速度をISは出せるという事実。これはとても大きな発見といえる。ISが何らかの力で空中での静止は勿論、急加減速や急停止など劔胄では不可能な機動すら可能にしているのは既に見た映像から知っていたが速度はやはり映像だと印象が異なるようだ。

劔胄のみならず空中戦闘の際はエネルギー戦となる。推力を用いて上昇や下降、旋回を用いて高度エネルギーや速度エネルギーへと変換し、劔胄ならばその力を刀に乗せた互いに交差しあう猪突戦^{ブルファイト}を、戦闘機ならばそれを回避に用い相手の背後を取り合う尻追^{ドックファイト}い戦を行う。つまり、相手より高度を取るか速ければ良いのだが此処で問題がある。実は高度を取るよりも速い方が断然と強いエネルギーを持つという事だ。

空戦エネルギーは重量に加速度を二乗したものを二分した速度エネルギーと重量に重力加速度と駆け下りた高度差を掛け合わせた位置(高度)エネルギーから成り立つ($E \parallel 1/2 m v^2 + m g h$)。この中で、速度は高度と異なり二乗されるのだ。仮に相手の方が此方($x \text{ km/h}$ と置く)より 50 km/h 速いとするると大体 $125 + 5x$ 分の高度を相手より得ねばならない。つまり同じ重量の場合、速さこそが空戦を制する。だから速度が速い機体は恐ろしいのだ。

特にISには旋回性ならば分があらうが、こと速度となれば窮地に立たされる。彼方には高速徹甲弾を凌ぐ劣化ウラン弾や熱量光線兵器、それに劔胄の甲鉄を紙のように貫く電磁波砲^{レールガン}など遠距離から一撃で破壊する術があるが、此方には野太刀に脇差、それにギリギ

り投擲に使えそうな野太刀の鞘の櫃に仕込んだ貫級刀しか無いのだから。

猪突戦に慣れた身としてはその他の空戦方法はどうしても慣れないが、選り好みを出来る程剣に長けてはいないのは自覚している。

ならば、戦い方を変えるしかない。そう分かっている、元々彼の剣は劔胄走法をどう変えても問題ないものだ。しかし、それに慣れ過ぎれば戻った時に本来の走法を忘れてしまい、また剣を変えねばならない。新たな情報は有益なものではあったが、課題を増やす結果になった。溜め息を吐き出すと資料室から出ようとした時に、違和感は消えた。かなり長い間見られているのは気付いていたが、特に怪しまれる動きはしていない。軍や研究施設でなくても何処でも手に入れられるデータの閲覧、しかもそれ自体に機密もない国内外で広く使われている第二世代ISのデータだ。怪しい点はまるでない。

幾ら何でも警戒され続けるのは分かっていたにしろきつかったのですぐに外される為にも剣も必要以上に手数を増やした欺瞞などで見取り稽古を防ぐ術があるのでそれを用いたり、不自然な言動をせずに信國との交流も金打声のみにして敢えて監視を放っておいたのだが、それに拍子抜けしたのかそれとも……、しかし相手の考えなど読めるわけなど無く相手の細かく思考など考えた所で仕方は無い、そう判断すると部屋の外へと出て行った。

（信國、今まで此の学園に入る際のチェックで見つかってはいいいな？）

《何故、其の様な世迷い事を？》

久方ぶりとまではいかないまでも、暫くロクに言葉を交わさなかったのに折角交わした内容が問題だったのか、仮にも信國派の始祖たる劔冑としての誇りを傷付けられたからか今まで聞いた事の無い様な低い声を出している気がした。

（此方の世界でも最重要兵器の研究施設。もしもを考えなくてはならない）

《心配など無用。冑^わとて秘奥たる相州伝を伝えしもの。技や人の出入りに関しては気にせねばならなかった故、逆に分かる》

（なら良いんだ、此の学園は出入りに五月蠅いようだからな。今、下手に出る訳にはいかない。ISを知りきっているなら兎も角、何も知らずにいる訳にはな）

《諒解した。しかし御堂よ、冑^わは劔冑。劔冑の価値は戦場^{いくさば}でこそ輝くものよ。然らば、斯様な場ではなく矢張り空にこそ在りたいものよな》

（堪えろ、少なくとも目立つのは今は良くはない）

確かに騎航せねば腕が落ちる、剣のみでは無く騎航もあってこそ劔冑だ。片肺で何かを仕留めようなど未熟者にはどだい無理な話だ。

それは分かっているが、もし劔冑というISに劣るが比肩する存在として見つかった場合（勿論実際はどうなのかはまた別の話であるが）彼の自由は消滅する。徹底的に研究と称した製造法から騎航のコツなどを拷問によって聞き出し、甲鉄の一欠片すら残さずに調べ上げるだろう。

別にそうなれば全てを切り払えばいいのだが、まだその時期ではない。まだISと闘った経験も皆無で、それに戦法も未だ確定していないというのにそれを確かめる間も無く行くなど不安定要因が多過ぎる。

懸念せねばならない事がまた一つ増え、頭を抱えねばならない事になる事実について溜め息を吐き出すと、チャイムが鳴る前に急いでM6の調整と整備の為に足を急がせた。休み、考える間すらも与えないかのように。

第一章 七話（後書き）

フルメタの外伝がそろそろ発売、それに村正魔界編が二巻が来月十日！

これは俄然やる気がでますね

いや、更新速度もきつと速くな…る……？

あと、多分暫くの間はレイは出ません

IS二巻の前後からの予定

おにゃのこ書くのが面倒とかじゃないよ！
設定とかの都合上です！

第一章 八話（前書き）

初めての空中戦闘

そして早めの展開……な気がします（汗）

第一章 八話

大空を眺める。繰り広げられるは蒼空に溶けるような蒼と白の交差。それはただ早くただ迅く、正確に撃ち、避け、駆ける。蒼が放つ光を避けると白は翔る、駆ける、ただ蒼に交じろうとするように。

蒼は蒼空を舞う、優雅に雌鹿が如き軽やかさを持って。

白は駆ける、無骨なしかしどこかたどたどしい動きを少しずつ消しながら。

そして、白は蒼に近付こうとし、その無粋を許さぬ蒼の番犬に妨げられ地へと落ちる、墜ちる、堕ちてゆく。ただ墜ちると思われたその瞬間、白は何事もないかのように空中で反転し蒼空を越えるように進む。己の意志を、意思を、決意をただ叶える力を得る為に、ただそれだけに。

素晴らしい、されど流石に競技へと変わった以上は制限は掛かっているだろうから、本来の性能は是よりも更に高い性能であるのだろう。しかし、それでもやはり映像とは異なり、感じる風や鼓膜を刺激し続ける音から感じられるものは大きく間違いなく剣冑に劣らず否、幾つかを除き明らかに勝っているのをその五感で知り、更にその全てを覚え学び尽くさんとその持てる全ての神経を尖らせる。

あれと、おれはそうあれと戦い、闘い、勝つ。その為に此処まで、此処まで来たのだ。それを思うとただただ心が震えた。弱者と戦うより強者と戦う方がやはり血湧き肉躍る闘いが出来る。相手は此方についてよく知らずに闘う事になるだろうが、隠匿も必要な技術だ、

それを心得ぬ方が悪い。そう考えながら泰征は観客席から他の者の視線も気にせず眺めていた。

あれから一週間、二、三年による模擬戦闘や実機による自習が始まり、泰征自身も仕事が始まったのと彼の特訓が始まり殆ど顔を合わしていないが多少の心得はあったのか、それとも訓練の賜物か。未だ剣のみを展開した状態で蒼の機体の射撃を掠め、当たり前ながらも懐を狙うのを諦めてはいないようだ。その証拠にどこまでも目が死んでいない。あれは、必死に何かを得ようとし圧倒的不利を打開し勝利する事を確信してやまない目だ。

悪くないな、そう思い自然と笑みが浮かべた。織斑一夏を斬れば恐らく織斑千冬は殺そうと来るだろうし、この三年で織斑一夏とて強くなる。未だ回避に努めている白を眺める。これが二回目の戦闘であるとしたらかなりマシ、いや優秀だろう。

初めて人に銃口を向けられ、撃たれるのだ。例え殺傷能力は低いものでもどうしても恐れるのは道理。しかし、それを克服するのは容易ではない。そうなのだが一夏は泰征のように修行した訳でもないのにそれに打ち勝っている。並大抵の勇氣ではそれは不可能な事に泰征は感嘆と賞賛を思わずにはいられない。

だが、まだ爪が甘いと泰征は思う。蒼の機体——確かブルー・ティアーズとあの金髪の少女は言ったか、あの機体は先程から遠隔式の射撃兵器と射撃を同時にはしていない。つまりは、格下と侮っているかそれとも、使えないのか。恐らくは後者だろう。あの日の彼から聞いた言動からすればあの娘は格下に時間を掛けている今の状態に、焦りイラついているだろう。圧倒的な存在感と余裕を見せ勝ち、この場はISの真に使えるのは彼女のような人間だと誇示する良いデモンストレーションという訳だ。

事実、彼の存在は現在の女尊男卑に一石を投じる結果になっているそうだ。過去から虐げられ続けて時には子を産む道具として、時には男を歓ばせるだけの物として扱われられた女性という性からすれば男女平等すら平等でないと思うのだろう。

閑話休題。兎に角、彼奴は恐らく同時に二つの兵器を扱えない。ならばそれを利用し、銃を撃ちその後に自立兵器を使う一瞬を狙い、剣で自立兵器を切り払うなり剣を投げ相手の呼吸を外し、次の攻撃の隙へと繋げさせればよい。

其処に気付けるか、気付けるとなると初戦で冷静かつ客観的に分析出来るというのは優秀だ。『敵』に足る人材という事だ。剣については甚だ未熟だろうが、其の不足はISが補うおろか圧倒してくれるだろう。

もしそれが悟れたならば面白い、悪くない世界だ。其れ程までに楽しませてくれるとは此方の神は中々に太っ腹なものだな！

気が付けば、より泰征は笑みを深めていた。まるで新たな玩具を見つけた子供様に無邪気に、無防備なまでの狂喜で。織斑一夏の剣、そしてその先の織斑千冬の剣。更に次の、また其の次の闘いを考えるだけで彼は笑いを堪える事など出来なかった。

「このブルー・ティアーズを前にして、所見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

蒼のIS——ブルー・ティアーズの操縦者、セシリア・オルコツトは目の前にいる男の過小評価し過ぎた自身を僅かに恥じ、また彼

へ敬意を払った。

織斑一夏の白いISは約三十分もの間の猛攻を受けボロボロの様相ながらもどうにかまだ飛び続けている。そう、未だ飛んでいるのだ。

代表候補生として学園に来る前から既にISと共にあり基本を修めた自分となにも知らず流されるままに学園に入った彼とは例えようがない差がある筈だ。ISはすべての経験を蓄積する事で第二形態、第三形態へと進化する。つまり、ISが戦いをすればする程により強くなれるのだ。技量のみでなく、既に使っているISすらも量産機などと比べ遥かに高いレベルまで高めたもの、素人に敵う筈がないというのは最早必然的でした。

しかし、実際はどうか。最初こそ舐めてかかっていたが、時にはこちらの予想を超えた動きをしてつい本気を出しても尚、結果として今までの時間逃げ延びられている。そう、だからこそ、相手を本物だと認め、油断なく勝たせてもらう。

「それでは閉幕と参りましょ^{フィナーレ}う」

右手をかざし、『ブルー・ティアーズ』を織斑一夏へと向ける。狙いは一撃で終わらせれる位置、そこを狙えば……！ 自立兵器で機体の名にもなっている四機の『ブルー・ティアーズ』が獲物に狙いを付けた狼の集団の如く、一夏の白のISへと襲いかかる。それを避けるとセシリアは……笑った。

「左足、いただきますわ」

凍てつくような冷静な声が鈴のように響く。一夏にはまるで内側

から凍り付きそうな気持ちだった。しまった、痛恨と心を占めた。ISは装甲の代わりにシールドによって守られている。それに使われるシールドエネルギーを0にするのがISバトルだ。今の機体状態の情報が各種センサーが告げる。シールドエネルギー残量67、実体ダメージ中破。ブレードのダメージ無し。過去の兵器ならば中破となると一撃でも次当たれば旋空にも深刻な支障が出ただろう。

しかし、いくら頑丈とはいえど飛んでいるだけマシに近い状態なのは変わりないし、次の攻撃が絶対防御を使わせる攻撃ならばシールドエネルギーが少ない今、敗北は必至となる。それに左足、そのの装甲はさっきまでの破壊され、今無防備だ。当たれば確実に負けた。一夏は負けたくない、負けたくない。だからこそ彼は動いた。

「ぜいっやああああああっ!!」

ブーストを全開、無茶な加速をしてライフルへと一直線に進み、突撃する。ぶつかり派手に響く金属音と火花、それが一瞬中枢神経を麻痺させたように痛んだ。

「なっ……!!? 無茶苦茶しますわね。けれど、今更無駄な足掻きっ!」

セシリアはあまりの無茶苦茶な回避方法に呆気と共に近接武器を手に行っている一夏に接近され動揺した。その一瞬に今まで揺るがなかった優位を超えた行動に隙が出来たからか、一太刀を浴びせられ、緊急後退しようとする中で返す刀をかわし損ねた。削られたものの、それでも一夏の不利は変わらない。そう確信があるセシリアは再び『ブルー・ティアーズ』を一夏に向けた。

一夏が口元を歪めて笑みを浮かべているのに気付かずに。

村上泰征は剣鬼だ。彼の全ては剣から成り立ち、その剣の為に今を生きている。今の彼がもし剣を握れぬとなれば、戦えぬとなれば笑って己を殺すだろう。その一方で彼は戦いの中ならば相手を殺すまで死ぬ気はないとすら平然と言っている。剣を否定されれば潔く死ぬが、戦いの中で勝ちを譲る気はさらさら無い、言わば戦いと剣に魅せられた狂者である。

彼はその一瞬魅せられた。武者に、いや剣鬼には魅せられない訳がない光景だった。戦鬪の綻びを見つけ、そこを見事に突いたのだ。織斑は確かに腕はまだまだ素人ではあるものの、本質を見抜く洞察力は中々のものようだ。

「なんですって!？」

織斑が自立兵器を切り払った事実はオルコットに驚愕の表情へと一変させた。動きが止まる。必殺の陣形が崩されたのだ動揺するなと言うのが難しい。

隙が出来たのだ、それを狙わない手は無かろう？ 思惑通り、織斑は再度切り込もうと近付く。打突を狙う構え、地上で太刀打つならば話は別だが空で臨むとは、少し肩を落とした。切り込むなら右上段八相か右肩に担ぎ上げてからの袈裟切りか下段脇構えか下段八相構えからの逆袈裟が常だろう。当たり前であるが地上ですら最小の動き故に速く、そして点であり避けるのが容易でないであれど、上手く突きを当てる事は至難の業。それが空ならば尚更だろう。

刀法が確立していない事が要因だろうか、ただ慣れた手を遣うのが良いと考えたのかは分からないが無闇やたらな気がしないでもない。

「くっ……！」

だが、相手に脅威と判断させるには最適だったらしく、回避を利用した後方へ下がると再び自立兵器を飛ばした。

「この兵器はお前の命令を送らないと動かない！ しかも————
——」

そう言いながら襲いかかる『ブルー・ティアーズ』の推進機スラスターを破壊する。機体の万全で無くともそれを墜とせるのはISという機体のおかげか、それとも織斑一夏という男の持つ能力なのか。

背筋に震えが走った。恐怖ではない、歓喜だ。愉快ではない訳がない。世界を変えたと云われる兵器の可能性を垣間見れたのだ。

「その時、お前はそれ以外の攻撃をできない。制御に意識を集中させているからだ。そうだろ？」

どうやら言葉で相手の動揺に付け込むか、上手い戦い方だ。中々に参考にしたくなるものだと感じてしまう。相手側のオルコットも流石に口にされたくないだろう秘密がバラされたのだ。これ以降の模擬戦闘ではその動きを読まれ通じなくなるだろう事を考えると最早冷静に対応は出来まいか？

となると織斑の有利は揺るがないものである。近距離の間合いに入った際に近距離用の兵装で攻撃する事も出来たろうになかった

(もしくは出来なかった)のを見ると間合いに入られれば織斑の勝ちが決まるか。否、まだそう断言は出来まいか。互いに手の内を明かしていないかもしれない。少なくとも、此処でまだ全てを晒しはいまい。予感でしかないがそんな気がしていた。

「はああ……。すごいですねえ、織斑くん」

ピットのリアルタイムモニターからデータ採集も行っていた副担任の山田真耶はため息混じりに呟いた。二回目のISの起動で動かし、かつ代表候補生に負けず劣らずという大健闘であるが、実姉の千冬は忌々しそうな表情だ。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からの癖だ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

「へえええ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

なんとなく感心しながら言う真耶であったが、千冬は少し動揺するかのようにハツとして言葉を続ける。

「ま、まあ、その、なんだ。あれでもあいつは一応私の弟だからな……」

若干照れているのか、動揺しているのも隠しきれず、外から見れば多少頬が朱く染まっているような気がしないでもなかった。

「あー、照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

昔からの憧れでもある常に冷静沈着で完璧なお姉様な千冬がアタフタしたのはそれなりに長い付き合いのある真耶にしてはどこか可愛く見えてしょうがない。

そんなことを思っていたら頭が割れるような激痛が走った。ヘツドロック、剣で鍛えた千冬の腕から繰り出されたそれは説明しがたい痛みを頭に送り続けた。

「いたたたたっ！？」

「山田先生、私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！　わかりました！　分かりましたから、離し——
あううっ！」

悶絶し呻く真耶の横で篠ノ之箒は目を逸らすことなく、ただ食い入る様にモニターを見つめ続ける。

一週間、たったそれだけの時間だったが三年間はしていなかった剣を昔の強さに戻す事は無理だったが、真剣に打ち込もうとする力強さと瞳の中で静かなながらも激しく燃えるような闘志は昔よりも遙かにあって少し、いやとても格好良くて、ち、違う違う！　その、なんだ、そ、そう！　ま、真面目に取り組んでいて昔の一夏程ではないものの戦闘の勘位は取り戻してはいると思う。

しかし、ISとなると話は変わってしまう。相手は一国の代表候補生として数多くの中から選ばれたエリートだ。

そんな相手と一夏が戦う事に不安も怖さもある。だけれども、それはあまりにも一夏を信用していないという証拠の様で嫌だった。一夏を信じる、ただそれだけなのに上手く感情を制御出来ず、心配になっている。

(一夏……)

祈るのは自分の性格にはあっていない。だからこそ、目を離さず、いや離せずにいる。様々な表情を入り交えた表情で白のISを凝視していた。

俺は残った二つのビットの一つを撃墜し、もう一つを蹴ってあらぬ方向へと飛ばした。

セシリアはまだ集中していてライフルまで間に合わない。

チャンスだ、ライフルがこちらを向くその前に、そう今、一撃を入れる！
セシリア 奴よりも早く！

「……………かかりましたわ」

にやり、と。セシリアは笑った。それは敗北を予見した諦めの笑みとは程遠い、獲物を狩る笑みだ。

——まずい！ 頭よりも早く本能が、第六感が危機を告げる。後退しようとしてスラスタ全開にするが、遅過ぎる上にダメージのせいか出力が上手く上がらなかった。

セシリアの腰部に取り付けられたスカートのようなアーマーの突

起が開かれ、動く。隠した手の内、必殺の一突き（スティング）。

「おあいにく様、『ブルー・ティアーズ』は六機あってよ！」

くっ、回避は……無理か！ しかも、レーザーではなく弾頭型だ、ミサイル威力ならレーザー以上。

くそっ！ これから負けるであろう事への悔しさと口惜しさを感じつつ、俺は爆発の中へと包まれていった。

爆発の中へと入ってしまった織斑一夏に泰征は失望と残念を思った。所詮は泰平の世に生きる人間に過ぎず面白い程度に過ぎなかったのかと。試合ならば負けは負けで終わりだが、実戦は死を意味する。敗者は鍛えれば輝く可能性はあるが、強者と戦うのを望むなら勝者を叩くのが一番だ。

面白い人材ではあるに違いないが、敗者には今興味を持たない。退屈凌ぎに信國とでも持て余した暇を潰そうとしたその時だ。

——『白』が、顕現した。

「一夏っ！」

モニターを見つめていた筈は悲鳴混じりの声を上げた。

その声にヘッドロックをかけていた千冬もそれに痛みの絶叫を上げていた真耶も爆煙に染まった画面を真剣な面持ちで見つめる。

「――ふん」

黒煙が晴れたその時に、千冬は鼻を鳴らしつつ誰にも分からないように安堵の色を見せた。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

弾けるように真の姿を見せる機体を見て、少し微笑んだ。

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

（な、なんだ……？）

俺は混乱していた。撃墜されたと思っていたのだから当然だ。しかし、意識に直接送られるデータと目の前に現れるウィンドウ。その真ん中にある「確認」と書かれたボタンを訳も分からず押すと、頭の中に膨大な意識の裏側にあったデータが再び流れてくる、いや違う。

――正確には整理されているんだ――

感覚でそれが分かった。そして、俺を包む――いや、俺の身体といても過言じゃない――ISが光の粒子となって弾けて、再び形を為す。

この時、俺は確信した。これでやっと、この機体は俺専用になったのだと。

セシリアはあと一撃を加えれば倒せる筈の敵がまだ墜ちてない今の状況は性質の悪い冗談であって欲しかった。しかも、しかもまだ本気すら出せていない状態だったなど！

「ファ……一次試行！？　あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたと言うの！？」

淑女にあるまじき慌てっぷりではあるが、それすら気にならない程彼女は動揺していた。いや、戦慄や恐怖といったものの方が近い。今までの彼の見せたものがほんの小手先の技術だというのだから！

考えを止める。もう自分の持ち得る全てを出し尽くしてでも相手をと、倒す。今までの事象は後から考えればいい。風、温度、大気の状態に弾道予測……全てのデータを一瞬で計算。次で仕留める為に狙いを付ける。

『白』は今までの姿を明らかに見て取れる変化をしていた。どこか角の多い印象は騎士を彷彿させる優美にして清廉な、現代の騎士とでも言うべき趣きの流線型を持っていた。

手にする片刃剣も機械的ではあるものの反りがより深くなり太刀、長さからすると野太刀、それも刀身だけで身の丈はある。刀身にも樋が入り、そこからは僅かに光が漏れ出していた。まるで闇を祓うかのように。

翼のようなスラスタを展開する。白のそれは穢れを知らぬかのように今までの損傷は消えていた。刀を『雪片式型』をゆっくりと

構え見得を切る。刀身から漏れた光はまるでその名の如く、振るうと雪の散るように見えた。

かくして舞台の二幕目は上がり、『白』は物語の舞台へと立った。未だ眠るもう一つの『白』を、同胞^{かたはら}たる『紅』を待つ為に。

さあ物語を、物語を始めよう。I S 『白式』今ここに――生誕。

第一章 八話（後書き）

ちよつと伸びすぎたので二部構成に
なのでまだ戦闘はちよい続きます
といっても原作と同じにするかは未定ですが

第一章 九話（前書き）

セシリア戦の続きと終わりです

殆ど原作と同じなのは思考力が追いつかなかったんです！

……自慢でも何でもないですね、すいません

第一章 九話

真の意味で自分の機体になった白式を感じる。まるで一体になった、いやそんなものではない。元よりあった手足以上に繋がっている感覚。

手にした刀のデータを見る。『雪片式型』、嘗てISバトルの世界大会『モンデ・グロッソ』の第一回で総合部門及び格闘部門で優勝した実姉、織斑千冬の駆る『暮桜』が持っていたものと同じ銘^なを持つ剣。

（雪片……、千冬姉の振るったツルギか）

それを知った一夏は微笑んだ。誰よりも自分を心配して、常に何があっても守ってくれた姉からの手向けにも感じられるソレは何よりも強い援軍に感じる。

「俺は世界で最高の姉を持ったよ」

微笑みながら一夏は言った。そうだ、だけど俺も力を持った。なら、もう守られるだけの関係を止めよう。そう思うと力を、決意をただ一つに集約される。

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？ あ、あなた何を言って————」

分からないだろう。別に分かって欲しいから言った訳じゃない。これは決別、昨日までのただ守られるだけだった弱い自分への、そしてそれを世界へ告げる誓いだ。

「とりあえず今は、千冬姉の名前を守るさ！」

何よりあの格好いい千冬姉の格好が付かないような真似なんて出来ないだろう。冗談でも笑えない。

「というか、逆に笑われるか」

今更の事に気が付き苦笑するほかなかった。

「さっきから何の話を……とにかく、これでっ！」

再装填されたビットから再びミサイルが放たれる。直線に近い機動だが、先程までのビットとは速さがまるで違う。だが――白式はそれに完璧に対応してくれる。

（見える……！）

右手の雪片を握る力を込める。こっそりと千冬姉の試合の記録を見てきたんだ、恐らく誰よりも真剣に。使い方は分かる。あとはそれを思い出して使うだけだ――！

金属を断つ僅かに甲高い音が耳を突き抜け、そのまま横を抜けた。更に加速しもう一機を避けて進む。

駆ける、駈ける、翔ける。目指すは直線上にいる敵ただそれだけ。前へ、前へ、前へ！ このISなら、白式なら相手の反応よりも速く動く事が出来る。予想ではなく確信、それが頭から流れる情報から伝わる。

圧倒的なまでの使いやすさ、それは目の前のセシリアを倒す為だけに向ける。

「かかりましたわね」

圧倒的なまでの不利の中セシリアはそう不適に笑いながら言った。何かの確信があるのだろう、しかしもうビットはミサイル一機のみしかも白式のスピードに追いつけてない。ライフルも未だ構えていないのにまだ他に武器が……！

思い出した、自分が完璧に破壊したビットは三機、だが足で吹き飛ばしたビットはどうだったか？ 確認していない！ しかも、例えばそれを今までの間、彼女が後ろに隠していたのだとしたら？ 今みたいになんかすぐ撃たれるだけだ！

「ぐうっ！」

急いで目の前のビットを斬って仕留めると向けられたライフルの銃口から逸れて飛び続ける。

それでも、近付かなくては。それは一か八かを分の悪い賭けに賭けるしかない状態。やるしかないか……！ 覚悟を決めた、後はそれを実行するだけだっ！

白式のウイングのスラスターを全開、一瞬の内に加速する。一次試行までの『白式』とはまるで違う瞬間加速度はセシリアにも驚愕の表情を貼り付けたが、そのままライフルを向ける。全開のままならば次の行動に回るまでのタイムラグが遅いだけでなく、初心者ならどうしても慣性のように暫くは止まれない。多分、俺が考えていうことは少なくともセシリアも考えているだろう。

向けられた銃口は少し位置が一夏の先に向けられた。見越し射撃、一夏の予想通りだ。360度全領域を覗ける視界から引き金を引く瞬間を見届ける。

まだ早い、引き金を引こうとするのが見えるがまだ少し遅い……。もう少し……。そう今だ！

狙った瞬間をギリギリで旋回、その回転で方向を上方転換。幾ら優秀だろうと地上で暮らす人間が想定し辛い場所からの攻撃にはどんなに分かっていようとも遅れる。例えば頭上や――真下からの攻撃なら。

剣に全ての力を込める。その一念に応えるように《雪片式型》は白の光を放つ。清らかでどこか優しげな光は後ろへと流れる姿はまるで雪のようだ。

「おおおっ！」

突撃される中、セシリアは今日何度目かの驚愕を味わった。近接兵器《インターセプター》を展開しようにも声が上手く出ない。そこで気付く。これは、この感情は驚愕ではなく、恐怖なのだと。あの強い意志を宿す瞳に、気迫に己の心が灼かれているのだと。

刃は下から迫る。しかし、反撃は出来ない。それには動くのが遅すぎた。せめてもの慰め程度に狙撃手としてはナンセンスだが、レーザーライフル《スターライトMk?》を盾にする位だ。とっさに受け止める為に体が反射的に動いたが、彼の動きにはついていけない。そのまま、刃が振り上げられるだろう。この一撃はさつき与

えられたダメージとは比にならない威力を秘めている、その確信を肯定するかのように白の光が刀を纏う。そして、光はそのまま彼女に襲いかかる———事はなかった。

『試合終了。勝者——セシリア・オルコット』

「……あれ？」

どこか情けないような対戦相手の声が、今の彼女の心を表していた。

試合後、千冬姉のお説教なのか傷口に塩を塗られ、更にIS起動における『ルールブック』なる電話帳並の分厚さの本（一応これって教科書に入るのか？）を抱えて、本当に守る必要があるのか分かんなくなる唯一の身内と別れると文字通り刀みたいに触れれば斬れるみたいな雰囲気（いや、性格も似たようなもんか）な幼なじみが待っていた。

体中が疲れて動く気はしなかったけど寮へ足を向ける事にした。そんな時だった。

「ああ、織斑殿ですか。お疲れ様です」

口調通りに真っ直ぐに伸ばされた背筋は泰征の生真面目さを表しているが、目に髪でも入ったのかボサボサの蓬髪の前髪をクシャリと掻き撫でているその様子は只でさえ実年齢より見た目が幼く見えるのを更に年を下に見せていた。

「ああ、今まで千冬ね……、いやいや織斑先生に機体運用について

説教受けていたんで今から寮に帰るところ。つと、あとその丁寧語止めてくれないか？　なんつーか、年下がタメ口で話すっていうのが違和感あってさ」

最後にあつたあの日も何かとタメ口になりそうな俺に好きなように話してくれればいいと言いつつも年下にすら敬語な彼に対して何となく申し訳がない気がする。見た目はともかく、常に敬語で話されるのはどこか背中がむず痒くなる。

「此方としては話しやすいのですが、そう言われるならなるべくはそう致しましょう。して、其方の御仁は？」

そう言いながらも敬語である辺り、かなり敬語がかなり板についているようだ。箒ほどでもないがやはり俺の周りは堅物に囲まれる学園生活になるかと思うと少し憂鬱に……いや、かなりなりそうだ。

「織斑殿？　何かの考えが纏まらぬ内に申し訳ないが聞いている質問に答えて貰いたいのだが」

「オ、オホン！　そ、そうだぞ一夏。説明しろ」

つと、そうだった。二人は初対面な上に箒の方は人付き合いが昔みたいに上手くないだろうし、泰征さんの方も半分は軍隊みたいな場所だったから女性が苦手に苦手意識があるとか言ってたしな。箒の場合は、箒自身がどっちかと言うと性格がキツイのが原因だと思うんだが。

「あつと、この人は村上泰征さん。今の所はアリーナの整備を担当してる。ASの操縦が出来て、本来はそれでここの警備員の役割を

するつもりだったらしい。で、こっちは篠ノ之箒。俺の幼なじみでルームメイト。古流武術をやっていて、去年は全国大会で優勝してる位に強い。この一週間の特訓にも付き合ってくれた、いい幼なじみだな」

そう言って自分の言に頷く一夏を見ながら、篠ノ之箒は村上を観察する。隙だらけのように見えて全く油断の無い感覚、少なくとも彼女には勝てるか怪しい相手だと確信した。今まで会った強いと感じる人間はどちらかという張り詰めた糸のようであったが、目の前の人間は例えるなら蛇のようだった。機敏性としなやかさがある、緊張のない動き。いつでも動け、対処出来るといえる体勢を常にしている村上に驚嘆と危険を感じた。

こんな危ない火薬のような奴を一夏の近くに置くのは間違い無く一夏に何らかの危険となって降りかかるだろう。べ、別に無視されたからという理由ではなく、あくまで自分の感覚を信じて、だ。危機察知能力は剣を学んだからか人並み以上にはある自信はあるからこそ信頼出来る。それが告げる危機、それは圧倒的に不利なのだろう。意図せずして左手の竹刀を強く握る。

そう警戒されてるのに気付いたのか微苦笑といった表情で見て来る。

「村上泰征と申します。よく間違われるから慣れてますが、18で男です」

そう言いながら先程までの警戒を解く。それなりに……少し分かり辛いが、独特の雰囲気さえなければ確かに女子に見れなくはない。むしろその前に年上らしい事の方が驚いたが。自分より小さい背丈

と童顔は中学生にしか見えない。副担任の山田先生と並べば確実に中学生のカップルに見えるだろう。つい一月前まで中学生だった人間が言うべきではないだろうが。

つと違う、そうではなかった。今もしかして、いやもしかなくても、勘違いさせていないか？　つまり、彼の言い分を纏めると彼を私が女子と間違えてそれが見知らぬ誰かと一夏が話していて面白くない訳が無く、彼に敵意を持っているのだという事だろう。

「ちよっ、ちよっと待て！　何か大きな間違いがあるのだが！」

「いえ、では織斑殿。疲れているであろうに迷惑をおかけした。篠ノ之殿にも無用の迷惑を被る羽目となり申し訳ない」

慌てて訂正をしようとしたのだが、どこか爽やかげながらも沈痛な表情を浮かべてスルーすると、そのまま職員用の宿舎の方へと向かって行ってしまった。

「何が言いたかったんだ、箒？」

心底、不思議そうにこちらを見てくるこの鈍感を体現する男に一発を加えるために竹刀を振り下ろしたのは悪くない、ああ絶対に悪くない！

自室にあるシャワー室、セシリア・オルコットはそこで多少熱めのお湯に当たっていた。思い浮かべるは今日の試合だった。

獣性と呼ぶにはどこか大人しく、理性と呼ぶには些か頭に血が行

き過ぎて向こう見ずになっていた。でも、愚直なまでに一直線に進んでくるその姿から何となく目が離せなかった。

父の、あのどこか母を怯えるような媚びるような眼差しとは異なる強い瞳。

父はISが登場する前から、名家に婿入りし数々の負い目があったからか常に母の顔色を伺っており、娘のセシリアから見ても情けなく、幼いながらに『父のような情けない男とは結婚したくない』という気持ちを抱かずにはいらなかったほどだ。

母は違った。強く厳しく、その為に数々の成功を収める成功者だった。セシリアが今のよう優雅に、美しく（他人の考えはさておき）振る舞おうとしているのは母の影響が強い。

しかし、今の彼女は一人だ。三年前の事故で彼女は両親を失った。残ったのは彼女と莫大な遺産だけだった。

遺産をハゲタカかハイエナのように狙う金の亡者達から身を守るだけの力を欲し、それはあっさりと叶った。IS適性テストA+、高ランクの適性を持つ者はどの国も手離したくはなく、イギリスは国籍保持の為に幾つもの好条件を出し、彼女は遺産を守る為に即断した。ここが肩の荷が少し下ろせる場所であつたからかもしれない、昔よりも母に届いたと驕っていたからかもしれない。セシリア・オルコットは織斑一夏を舐めていた。よくよく考えてみれば、彼はセシリアや他の学生と違い強制的にこの学園へ入学させられている。希望で入った人間と無理矢理入れられた人間とではやる気も意気込みも違う。そんな事すら忘れ、ちやほやされていると思った（実際にも彼自身の状況はともかく、周りからは目立っていたし最前されているように見えなくもない）セシリアは一夏にわざわざ噛み付い

たのだ。今になってみれば、淑女らしからぬ振る舞いで思い出すと穴があったら入りたい気持ちである。

けれど、違った。あの日から一週間、そうたった一週間しか経ってないのだ。訓練のしようもない状態で経験などあって無いような人間と思えぬ才覚とそれに劣らぬ勇氣。

I S操縦者でさえ銃口を向けられて全く動揺しない訳ではないのに、銃など殆ど無い日本社会の人間である一夏が恐れずに進めるその勇氣は蛮勇とすら思える。

でも、頭ではそう思っているのに、心はそれに惹き付けられている。

「……織斑、一夏……」

彼の名前を唱えてだけで心は大きく揺さぶられ、体中が熱く燃えるような何かを感じる。

彼女の人生で経験のない理解不能な感情が頭を体中を行き交い、爆発しそうだ。これが、恋？ それとも……？ 分からない、分かる筈がない。

それはある種の歓喜であった事には間違いない。論理性を好む天才肌の彼女には対等になれる男はおろか、同年齢にすら存在しなかった。それは彼女の努力の賜物でもあるが、それでも唯一対峙した上で教官を倒しただけあり優秀過ぎる程に優秀だ。張り合える男、好敵手の存在は彼女を満足させるに足るものであった。

白無垢のような肌をただ水滴が零れ落ちる。ただ、体の熱を冷ま

す為に少し冷たくしたお湯が頭を明確な思考に戻した。

（明日、彼と話してみましよう）

それとクラス代表の辞退も。

（今回は私の負けです）

でも、次は負けませんわよ？

晴れやかな、見た者の心を奪うような微笑みを浮かべると彼女は支度をする為にシャワーの水を止める。

彼女の足元を水が流れていく。空は明日も晴れるかのように僅かに星が見えていた。

第一章 九話（後書き）

これで一章は終了

続いてついにフルメタが出っ張り出す二章になります

今までぼかしたような登場しかせませんでしたでしたが遂に、遂にです！

あ、あと誤字脱字に感想は勿論、こうやれよ作者とかためえの作品のここが気に食わんなどの批評、批判も受け付けております

正直、迷走しまくってる気がしてしょうがないので是非とも！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5756t/>

交じりあう世界の中で

2011年11月13日12時05分発行